

# 島の暮らしを支える仕事

## －島旅からみえてきたもの－

株式会社 水 土 舎

最高顧問 乾 政 秀

第 **578** 号  
(第 50 卷 第 2 号)

編 集 一 般 財 団 法 人 東 京 水 産 振 興 会  
発 行

日本漁業は、沿岸、沖合、そして遠洋の漁業といわれるが、われわれは、それぞれが調和のとれた振興があることを期待しておるので、その為には、それぞれの個別的な分析、乃至振興施策の必要性を、痛感するものである。坊間には、あまりにもそれぞれを代表する、いわゆる利益代表的な見解が横行しすぎる嫌いがあるのである。われわれは、わが国民経済のなかにおける日本漁業を、近代産業として、より発展振興させることが要請されていると信ずるものである。

ここに、われわれは、日本水産業の個別的な分析の徹底につとめるとともに、その総合的視点からの研究、さらに、世界経済とともに発展振興する方策の樹立に一層前進を加えることを考えたものである。

この様な努力目標にむかつてわれわれの調査研究事業を発足させた次第で冊子の生れた処に、またこれへの奉仕の、ささやかな表われである。

昭和四十二年七月

財団法人 東京水産振興会  
(題字は井野碩哉元会長)

目次

島の暮らしを支える仕事

— 島旅からみえてきたもの —

第五七八号

まえがき

一、日本の離島のすがた

二、農林業

三、漁業・養殖業

四、鉱業

五、建設業

六、製造業

七、観光業

八、その他

九、島旅からみえてきたもの

あとがき

時事余聞 編集後記

1 7 15 37 67 72 73 91 103 112 124

いぬい まさ ひで  
乾 政 秀

略歴

▽昭和二十三年神奈川県生まれ。昭和四十五年東京水産大学卒、昭和四十七年同大学修士課程修了。民間の海洋調査会社に十七年間勤務し、沿岸域の海洋調査に従事後、平成二年株式会社水土舎を設立し、代表取締役就任。平成八年東京水産大学非常勤講師。平成二十三年最高顧問に就任。漁業・漁村の多面的機能の検討や環境・生態系保全対策等の政策立案の業務に携わるとともに、全国の漁村・離島を歴訪。

# 島の暮らしを支える仕事

—島旅からみえてきたもの—

株式会社 水土 舎

最高顧問 乾 政 秀

まえがき

私は二〇一一年に現役を退き、翌年から離島の旅を続けています。二〇一五年十二月までに訪れた離島は現役時代を含めて一七〇島になります。

私の旅好きは高校一年生の時に、小田実の「何でも見てやろう」を読んでから始まりました。フルブライト留学を終えた小田が、世界をヒッチハイクで回った体験記です。この本に刺激されて、大学に入ると、新潟県から山口県までの日本海側、四国一

最初に行った島は伊豆七島の新島とその隣の鵜渡根島

周、九州一周をヒッチハイク。無銭旅行に近い貧乏旅行でした。大学二年の時に、北海道の天塩川を源流から河口まで、三人で二週間かけて川下りをしました。天塩の駅で、「チツキ」で川下りの装備を送り、仲間と別れて稚内まで行ったのですが、宗谷岬の「最北端の碑」の前で、バイクで日本一周をしていた同級生の内須川三郎君にバッタリ会い、バイクの後ろにしがみつきながら函館から大間に出て、盛岡まで旅を続けたこともあります。ちなみに内須川君はバイク旅行のスポンサーだったキグナス石油のニチモウ(株)に入社し、若くして取締役になりましたが、早死にしまいました。

私が最初に島に行ったのは伊豆七島の新島とその隣の鵜渡根島です。鵜渡根島は当時から無人島でした。大学二年生か、三年生の時に海洋地質学研究室の大学院生だった青木(旧姓黒田)三郎さんの誘いにのり物見遊山で出かけたものです。この研究室の教授が新野弘先生でした。東シナ海に石油があることを指摘した先達です。天塩川の川下りの時に採取してきたアンモナイトの化石やアスベストの鉱石をもって先生を訪ねたのが青木さんと知り合った縁でした。青木さんは地質の専門家になり、その後東洋大学の教授を務めました。彼の関心は、地質の異なる利島と新島の間にある鵜渡根島はどうなっているかというものでした。

それ以来、島になんとなく憧れるようになり、新婚旅行は復帰間もない石垣島、竹富島と、西表島(沖縄県)の三島でした。西表島は「イリオモテヤマネコ」が発見さ

れ、それなりに知られるようになっていましたが、当時観光客はほとんどいませんでした。私たちと一緒に島に渡った捕虫網を持った新婚夫婦は島に二泊する予定を一泊で帰ってしまいました。おそらくご主人が昆虫好きだったと思いますが、奥さんは未開のジャングルのようなところに連れて来られたのがショックで、ほうほうのていで逃げかえったものと想像されます。私たちは大きなヤモリやゴキブリに囲まれながら二泊三日を西表島で過ごしたのです。

次のきつかけは往年の名投手、「まさかり投法」で知られた村田兆治の話を聞いたことです。会社(株水土舎)を創めてまもない一九九三年に島嶼域の地域振興のイベントに協力して全国の離島の海産物を中心に、特産品を集める仕事をしました。このイベントの講演会で、村田兆治が講師になりました。彼は一九九〇年にプロ野球を引退後、離島にをかけて子供たちに野球を教える活動をしており、その活動を離島振興の一環として紹介されたのです。「これからも全国の離島を回って島の子供たちに野球を教えたい」と抱負を語っていました。この話がやけに頭の中に残り、私も自由になつたら、全国の離島を回ろうと考えるようになったのです。

もう一つの大きなきつかけは宮本常一との出会いです。仕事を一緒にしたシンクタンクの若い人から岩波文庫の「忘れられた日本人」をプレゼントされたのです。私の言動を見ていた彼は、多分、宮本常一に共感するだろうと踏んでのことだと思えます。私はただちに宮本のファンになりました。ご承知のように宮本常一は多くの離島

もう一つの大きなきつかけは宮本常一との出会い

を訪れ、戦後は日本離島センターの設立に尽力、離島振興に情熱を捧げた民俗学者です。

島旅をする人は、圧倒的に「団塊」の世代前後が多い

世の中には、島旅をする人はけっこう多く、時々旅先で休みを利用して離島を訪れる若い人にも会います。ただ、圧倒的に多いのが私と同じような「団塊」の世代前後の高齢者です。離島は交通条件が悪いこと、時化などで船が欠航することもあり、時間に余裕のある人でないと難しいからです。

全国の離島を制覇した島旅の達人に本木修次さんがいます。本木さんは高校の先生をしていましたので、テーマは学校や教育に関心がありました。旅先で本木さんが来たという話をとどころで耳にします。私は現役時代、「食と環境」をテーマにコンサルティングを営んでいました。とりわけ水産関連の分野を対象とした仕事をしてきましたので、私の島旅は「漁業、海といきもの、人と暮らし」をテーマとしています。島の人々がどのように暮らしてきたのか、暮らしているのかを調べ、いわば今までの仕事の集大成を島旅で実現したいと考えたのです。

小説家の有吉佐和子は離島にも関心が深く、鹿児島県三島村の黒島を舞台とした「私は忘れない」や御蔵島を舞台とする「海暗」などの小説を書いています。また「日本の島々、昔と今。」というルポルタージュもあります。このなかで有吉は、島に出かける時、先入観を持たないため事前に訪れる島についての資料は調べないと書いていますが、私の場合は、事前に下調べをしてから出かけることにしています。

島の下調べのバイブルともいえるのが、日本離島センター発行の「日本の島ガイド・シマダス」です。各島別に、島の概要、みどころ、島じまん、くらし、ひと、島おこしの順に整理されています。もう一つ欠かせないのがインターネットの検索サイト。「島の図書館」です。このサイトは島別に過去に書かれた調査報告をはじめとする文献リストをみることができ、ほとんどの文献が網羅されています。この検索サイトは個人が運営しているようなのですが、膨大な情報が収集されており、その情熱には頭が下がります。もう一つの検索サイトは「日本の島へ行こう」です。都道府県別に島の概要が書かれています。

出かける島はまったく行きあたりばったり

出かける島はまったく行きあたりばったりです。順番も計画もありません。というのも船は天候次第ですから、天気予報と「にらめっこ」して決めます。特に冬型の気圧配置になると船は欠航し、島に閉じ込められることになりかねないからです。以前の北海道の島に出かけて、雪の中に閉じ込められ、坐骨神経痛を発症、半年ほど大変な目に遭いました。以来、気温の下がる季節はできるだけ暖かい島に出かけるようになりました。

宿がある場合は泊まり、島のものを食べ、島の人に話を聞き、島を歩きまわることを、

必ず立ち寄るところは、漁港、漁協の事務所、役場ないしはその出先、郷土資料館等

島旅の基本としています。そして必ず立ち寄るところは、漁港、漁協の事務所、役場ないしはその出先、郷土資料館、神社、寺、西日本では教会の場合もあります。こうしたところを訪ねて情報を収集します。登山装備を必要としない安全な山道があれば、島の最も高い所に登ります。

それから日本人はすごいと思うのですが、多くの島には島の歴史などを個人的に書き留めておく市井の郷土史家がいる、私家本として文字に残しています。こうした人を探し出し、書き物を入手します。そして、図書館があれば図書館に行き市町村史(誌)の類いをコピーし、役場では地図、人口・世帯数、市町村要覧、統計などを集めます。島の「歩き方」は島の規模に応じて、徒歩、自転車、車の順になります。徒歩は概ね面積が五平方キロメートル未満の島、自転車は五〜一〇平方キロメートル程度、一〇平方キロメートル以上は車になります。

島から帰ってからが大変です。何しろ月に一回の頻度で島旅をしていますから、紀行文にまとめておかないと、頭が混乱して何が何だか分からなくなってしまいます。歳をとって物忘れが激しくなっていますからなおさらです。資料を整理し、訪問した島ごとに私なりに「離島覚書」を作成します。この整理に島旅に費やした時間の三倍も四倍もかかってしまいます。

全国の離島を旅していると、よくこんなところまで人が来て住んでいるなど感心させられる島が少なからずあります。なぜ、人は島に住んできたのか、何によって暮らし、生活を営んできたのか、その経済的基盤は何だったのか。本稿はこうした点に焦点を当て、島の人たちの生活を支えてきた仕事について、これまでに旅した島での実体験をもとに整理したものです。もとよりまだ半分行っていない島が残っていますので、ここでの記述は限定的なものであることをお断りしておきます。

## 一．日本の離島のすがた

### (1) 島の定義

本論に入る前に、島の現状を整理しておきましょう。

島とは、①自然に形成された陸地であること、②水に囲まれていること、③高潮時に水没しないこと、の三つの条件を満たすところと定義している。

国連海洋法条約の第一二二条では、島とは、①自然に形成された陸地であること、②水に囲まれていること、③高潮時に水没しないこと、の三つの条件を満たすところと定義しています。したがって、埋め立てて造成したところは島ではありません。

二〇一五年一〇月、米国のイージス艦・ラッセンが、南沙諸島(スプラトリー諸島)に中国が埋立造成した人工島から十二カイリ内を航行し、航行の自由を示す作戦を展開しました。中国が人工的造成した島は国際法では領土ではありませんので、米国が航行の自由を主張するのは国際法上まったく妥当な行動なのです。中国が人工造成し

た島を自国の領土とするのは国際法上認められていません。

排他的経済水域（EEZ）は領土の基線から二〇〇カイリの範囲と定めていますから島はEEZの範囲を定める上で重要です。このため、「低潮線保全法」（略称）という法律によって、EEZに影響を及ぼす離島では海岸線の変更が生ずるなどの行為を禁止しています。島嶼国である日本は世界第六位のEEZ面積を有していますが、この理由は日本が外洋に多くの島を抱えているからです。この面積確保に大きく貢献している島の一つが太平洋に浮かぶ沖ノ鳥島です。沖ノ鳥島は北小島と東小島という二つの小さな島からなるサンゴ礁域です。この二つの島は満潮時でも水面下に没することはありません。北小島は七・八六m、東小島は一・五八mとわずかですが水面に顔を出しています。つまり沖ノ鳥島はれっきとした島なのです。この水面から顔を出す部分が浸食されないように消波ブロックなどで囲って保護しています。日本は中国のように大規模な埋立造成によって飛行場をつくり、周辺国に圧力を加えるようなことはしていません。

## （2）島の数

さて、この島は日本にいくつあるでしょうか。海上保安庁は一九八七年に次の条件を満たす島を六八五二島と発表しています。①満潮時に周囲が〇・一km以上のもの、

②橋や防波堤など細い構造物でつながっている場合は島として扱い、それよりも幅広くつながっていて本土と一体化しているものは除く、③埋立地は除く、という条件です。この中には北海道、本州、四国、九州、沖縄本島が含まれますので、この五島を本島としますと、わが国の島の数は六八四七島ということになります。近年、本四架橋をはじめ本土と橋でつながった島が多くなっていますが、これらを含めた数です。

日本の有人離島は四一八島。そのうち、船等を使わなければ行けない島は三〇七島

このうち人が住む島、つまり有人離島は公益財団法人日本離島センターによりすると四一八島になります。ただ、この中には橋が架かっている島も含まれていますので、船か、ヘリコプターや飛行機を使わなければ行かないような島はどのくらいあるでしょうか。やはり日本離島センターが発行している「日本離島統計・二〇一三年版」によりすると、法指定を受けた離島三〇七島が掲載されています。法指定の法とは、島の振興を目的に一九五三（昭和二八）年に制定された「離島振興法」、「奄美群島振興開発特別措置法」（昭和一九年制定）、「小笠原諸島振興開発特別措置法」（昭和四四年制定）、「沖縄振興特別措置法」（昭和四六年）の四つの法律のことです。ただし、このうち二〇一〇年一〇月一日現在の国勢調査で住民の居住が確認されたが、二〇一二年四月一日現在の住民基本台帳には住民登録されていない五島が含まれています。この五島は北海道厚岸町の小島、東京都小笠原村の硫黄島と南鳥島、愛媛県上島町の赤穂根島、沖縄県竹富町の外離島そとしまです。また、法指定をもともと受けていない島は宮城県の金華山、広島県の厳島、香川県の小豆島、福岡県の能古島など二五あり

ますから、基本的に本土と橋でつながっておらず、かつ人が住んでいる島はあわせて三三二島になります。当面の私の島旅の対象はこの三三二島ということになります。当面というのは、かつて人が住んでいて今は無人島になった島も、なぜ人が住まなくなったかに興味があります。人生に残り時間があればこれらの無人島にも行きたいと考えています。ただし、無人島には定期船は通っていませんので、船をチャーターすることになります。

わが国の四七都道府県のうち二七都道府県に有人離島があります。このうち最も数が多いのが長崎県の五八島で、これに沖縄県(四〇島)、愛媛県(三四島)、鹿児島県(二八島)、山口県(二三島)が続きます。離島の数からみると、西日本に偏る傾向がみられます。

### (3) 島の規模

わが国の有人離島三三二島の総面積は七、七五四平方キロメートル

わが国の有人離島三三二島の総面積は七、七五四平方キロメートルです。わが国の総面積は、「平成二二年全国都道府県市区町村別面積」(国土交通省国土地理院)によれば、三七七、九五〇平方キロメートルですので、離島の面積割合は約二％になります。面積が一〇〇平方キロメートル以上の離島は一六島で、最大は佐渡島です(表1)。五〇～一〇〇平方キロメートルの離島は一〇島、同じく二〇～五〇平方キロメートル

が二三島、一〇～二〇平方キロメートルが二二島、そして一〇平方キロメートル未満の小さな離島が二六一島で、全体の七八・六％を占めています。

これを海岸線の距離でみましょう。日本の有人離島の海岸線の総延長は約八二〇〇kmです。全国の海岸延長は、「海岸統計平成二二年度版」(国土省、水管理・国土保全局編)によれば、三五、六六六kmなので、有人離島の占める割合は二三％ほどになります。最も海岸延長が長いのが、リアス式海岸が連なり複雑な海岸地形を有する対馬島で、これに奄美大島、福江島、中通島、佐渡島と続きます。

### (4) 島の人々

二〇一〇年の国勢調査時点で、この有人離島には約六七・三万人、二八・七万世帯が暮らしています。これは日本の人口の約〇・五％に相当します。人口が三万人以上の島は奄美大島、佐渡島、石垣島、宮古島、福江島、対馬島、小豆島です。何れも表1に示した面積の大きな島に相当します。

ところで離島の人口は年々減少しています。図1は法指定の離島三〇七島の人口の推移と全国の人口に占めるそのシェアの推移を示したものです。法指定から解除された離島が増えていますので、この図は現在の三〇七島をベースとした推移を示しています。今から六〇年前の一九五五年は二三〇万人を超える人が島に住んでいました

離島の人口は年々減少している

表1 わが国の100 km以上の島

|    | 島名   | 都道府県 | 面積     | 備考    |
|----|------|------|--------|-------|
| 1  | 佐渡島  | 新潟県  | 854.88 | 離島振興法 |
| 2  | 奄美大島 | 鹿児島県 | 719.88 | 奄美振興法 |
| 3  | 対馬島  | 長崎県  | 697.13 | 離島振興法 |
| 4  | 屋久島  | 鹿児島県 | 504.56 | 離島振興法 |
| 5  | 種子島  | 鹿児島県 | 445.52 | 離島振興法 |
| 6  | 福江島  | 長崎県  | 321.34 | 離島振興法 |
| 7  | 西表島  | 沖縄県  | 289.27 | 沖縄振興法 |
| 8  | 徳之島  | 鹿児島県 | 247.91 | 奄美振興法 |
| 9  | 島後島  | 島根県  | 242.68 | 離島振興法 |
| 10 | 石垣島  | 沖縄県  | 222.54 | 沖縄振興法 |
| 11 | 利尻島  | 北海道  | 182.15 | 離島振興法 |
| 12 | 中通島  | 長崎県  | 168.36 | 離島振興法 |
| 13 | 宮古島  | 沖縄県  | 159.22 | 沖縄振興法 |
| 14 | 小豆島  | 香川県  | 153.34 | 法指定外  |
| 15 | 奥尻島  | 北海道  | 142.97 | 離島振興法 |
| 16 | 舌岐島  | 長崎県  | 134.86 | 離島振興法 |

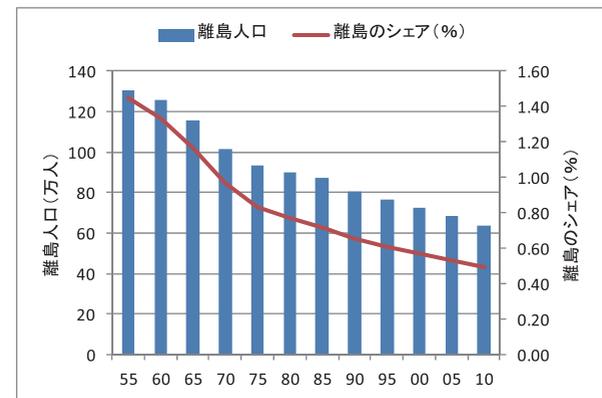


図1 離島の人口と国内人口に占めるシェアの推移  
離島統計より作成

が、二〇一〇年の時点ではその半分の六四万人に減少しています。また、全国の人口はこの間増えてきましたが、離島に住む人々の割合は一九五五年の一・四五%から二〇一〇年には〇・五%と大幅に減ってしまいました。離島の人口減少と高齢化が年々顕著になってきているのです。

### (5) 島の産業

ところで離島の人々は何によって生活をしているのでしょうか。二〇一〇年国勢調査結果から産業分類別の就業者割合を全国と離島で比較したのが図2です。離島の就業構造の大きな特徴は第一次産業のシェアがきわめて高いことです。全国の農林業の就業者割合は三・七%に対して離島は一三・六%、また漁業は全国が〇・三%に対して離島はじつに七・二%に及んでいます。ちなみに全国の漁業就業者は一七・七万人ですが、このうちの一二%に相当する二・一万人が島で働いています。もう一つの特徴は建設業のシェアが高いことです。これは後述するように島の経済が公共事業に大きく依存していることと関係しています。

一方、離島のシェアが低いのは製造業です。全国の製造業の就業割合は一六・一%ですが、離島では五・四%にすぎません。つまり離島では工業立地があまり進まなかったことを示しています。また三次産業の割合は似ていますが、細かく見ると離島は公

離島の就業構造の大きな特徴は  
第一次産業のシェアがきわめて  
高いこと

農業の就業者割合が島の規模が小さくなるほど減り、逆に小さい島ほど漁業の比率が高くなる

務の割合が高いという特徴があります。  
 兎に角、離島は一次産業に大きく依存していることが分かりましたが、これを離島の面積規模別にみると更にその傾向がはっきりします。表2は離島の規模別に一次産業と二次産業の産業別就業者比率を見たものです。一次産業の就業者の割合は島の規模が小さいほど高くなります。一平方キロメートル未満の島の一次産業の比率はじつに四五・七％に達します。もうひとつ大きな傾向は農業の就業者割合が島の規模が小さくなるほど減り、逆に小さい島ほど漁業の比率が高くなることです。一平方キロメートル未満の島ではじつに漁業就業者の割合は四二％にも達します。農地が少ない分漁業への依存度が高まることになります。

## 二・農林業

### (1) 自給農業から換金作物への転換

島の農業は基本的に自らの食糧を自給するためのものでした。島には平地が少なく、山が圧倒的に多かったので、山を切り拓き、段々畑をつくって、麦やサツマイモなどの自給に必要な作物を栽培したのです。人口の増加とともに畑は上へ上へと伸びて行きました。「耕して天にいたる」世界がほとんどの島の姿でした。一九六〇年代の航

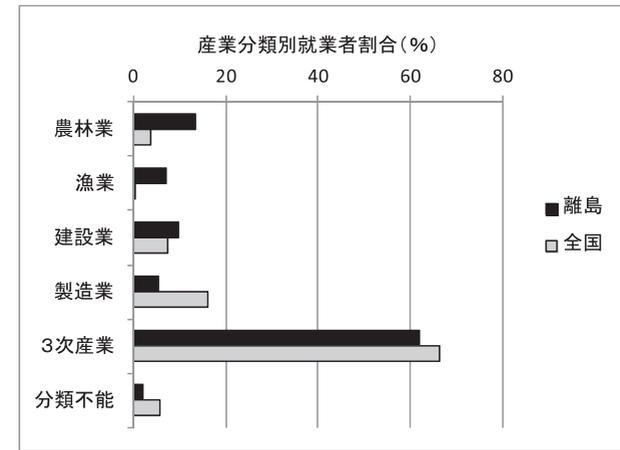


図2 離島と全国の産業別就業者割合の比較

表2 離島の面積規模別にみた産業分類別就業者割合（法指定離島のみ）単位：％

| 島の規模                  | 離島数 | 1次産業 |     |             |      | 2次産業 |      |      |      |
|-----------------------|-----|------|-----|-------------|------|------|------|------|------|
|                       |     | 農業   | 林業  | 漁業          | 合計   | 鉱業   | 建設業  | 製造業  | 合計   |
| 100km <sup>2</sup> 以上 | 15  | 12.9 | 0.3 | <b>4.4</b>  | 17.6 | 0.1  | 10.0 | 4.9  | 15.0 |
| 50~100km <sup>2</sup> | 10  | 16.7 | 0.1 | <b>5.2</b>  | 22.1 | 0.0  | 11.6 | 3.8  | 15.4 |
| 20~50km <sup>2</sup>  | 22  | 20.2 | 0.2 | <b>4.9</b>  | 25.4 | 0.0  | 10.7 | 5.6  | 16.4 |
| 10~20km <sup>2</sup>  | 21  | 17.1 | 0.1 | <b>12.2</b> | 29.4 | 0.2  | 11.0 | 3.6  | 14.8 |
| 1~10km <sup>2</sup>   | 139 | 7.5  | 0.0 | <b>24.9</b> | 32.5 | 0.2  | 5.1  | 11.2 | 16.5 |
| 1km <sup>2</sup> 未満   | 95  | 4.0  | 0.0 | <b>41.7</b> | 45.7 | 0.0  | 2.0  | 5.7  | 7.7  |
| 法指定離島全体               | 302 | 13.3 | 0.3 | <b>7.2</b>  | 20.8 | 0.1  | 9.7  | 5.4  | 15.2 |

離島統計より作成

水の確保が難しい島も多かった  
ので、田は少なく、島民の多く  
は麦とサツマイモを中心とする  
食生活だった

空写真を見ますと、瀬戸内海の島々に限らずわが国の有人離島のほとんどは山のでっ  
ぺんまで畑が広がっていました。水の確保が難しい島も多かったので、田は少なく、  
したがって米はあまりできませんでした。島民の多くは麦とサツマイモを中心とする  
食生活でした。

一九六一年にモスクワ映画祭でグランプリを受賞した新藤兼人監督の「裸の島」は  
こうした高度経済成長期以前の島の暮らしを描いています。ロケ地は三原市の沖の小  
さな島・宿祢島<sup>すくね</sup>で、その隣に佐木島（広島県）があります。ロケ当時、島には一人だ  
け住んでいましたが、映画にあるように島のてっぺんまで畑が連なっていました。こ  
こで麦とサツマイモがつけられていたのです。出演者は乙羽信子と殿山泰司、島の子  
供二人の合計四人で、セリフのない映画でした。ちなみに子役は佐木島の旧鷺浦小学  
校の児童で、私と同じ「団塊」の世代でしたが、すでにこの映画の出演者は全員他界  
しています。映画では乙羽信子が和船を漕いで隣の佐木島まで水を汲みにでかけ、天  
秤棒で水の入った桶を担ぎ、急な坂を登る設定になっていますが、実際は島の下に湧  
水がでていたようです。映画は少々誇張されている所もありますが、当時の島の厳し  
い生活の現実を表現しています。現在では、この宿祢島はうっそうとした森で覆われ、  
当時の原型をとどめるものではありません。

多くの島では、開墾した時に出土石で石垣をつくり、山の上まで段々畑をつくりま  
した。重機がない時代に、人々は手作業で営々として努力してきたのです。しかし、



映画・裸の島のロケ地だった宿祢島（広島県）



相島（山口県）の石垣を積んで造成された段々畑

このように祖先の努力によって築かれた農地は今では草に覆われ自然林に戻っているところが大半です。一部の島には当時の立派な石垣が残っている島もあります。代表的なのが萩諸島の相島（相しま）（山口県）や沖の島（高知県）などです。

また、農地が足りないために無人島を開拓して出作地として利用された島も少なくありません。例えば私が訪れたところだけでも、間崎島（三重県）と天童島、阿多田島（広島県）と猪子島、二神島（愛媛県）と由利島、岩城島（愛媛県）と津波島（つばしま）などです。ちなみにテレビの「ダッシュ島」は由利島が舞台です。

島の農業は第二次世界大戦の前後より自給自足の農業から、「お金になる」作物へと変化していきます。最初にひろまった換金作物が除虫菊でした。除虫菊は蚤取り粉や蚊取り線香の原料ですが、一八八六年に日本に渡来し、広島県を中心に瀬戸内海の各島で栽培されるようになりました。因島の隣の細島（広島県）や佐木島（広島県）では段々畑の上まで除虫菊が栽培され、春先の開花期には島は白一色に染まっていたといいます。しかし、戦後、化学的に合成できるようになり、除虫菊の栽培は姿を消しました。

葉タバコは戦争前後から多くの島で栽培されるようになります。当時の専売公社が買い上げましたので、安定した収入源でした。しかし、葉タバコの輸入が増え、一方で消費が減少した結果、葉タバコ農家の減反が進みました。現在でも比較的大規模に栽培されているのは萩諸島の大島（山口県）、相島（山口県）などです。

戦後の一時期は食料難から再び自給的農業に戻りますが、高度経済成長を迎えるころから農業は自給生産から換金作物の栽培へと大きく転換することになります。

## （2）サトウキビ

サトウキビは奄美群島、沖縄諸島、大東諸島、先島諸島の代表的な耕種です。奄美群島の二〇一四年度のサトウキビ生産額は五八億円で、農作物生産額の三分の一を占めています。沖縄県の場合はデータが少し古くなりますが、二〇〇六年当時のサトウキビ生産額は一〇七億円で、農作物生産額の半分強を占めていました。つまり亜熱帯域の農業はサトウキビに大きく依存しています。私が訪問した琉球諸島のうち、サトウキビがつけられていなかったのは津堅島、久高島、竹富島、黒島（以上沖縄県）などごく限られた島にすぎません。

サトウキビの作型は、①春に苗を植えてその年の冬にかけて収穫する春植、②夏に苗を植えて翌年の冬にかけて収穫する夏植、③刈り取った地下株から出てくる芽を栽培して収穫する株出の三タイプに分けられます。夏植が一般的で、九月ごろに苗を植えて、翌年の年末から翌々年の四月頃にかけて収穫します。つまり植え付けから収穫まで一年半を要します。

サトウキビの収穫は、耕作面積の広い大きな島ではハーベスターという機械が導入

亜熱帯域の農業はサトウキビに大きく依存

島の農業は第二次世界大戦の前後より自給自足の農業から「お金になる」作物へと変化していく



徳之島（鹿児島県）におけるハーベスターによるサトウキビ収穫作業



波照間島（沖縄県）における手刈りによるサトウキビ収穫作業

されていますが、経営規模の小さな島では今でも手刈りで収穫しています。手刈りの場合は「倒し鎌」で根元から刈り倒し、鎌でキビの頭部や葉を取り除き、茎を束ねて道路脇まで搬出します。このため多くの労働力を必要とします。例えば、波照間島（沖縄県）では、「ユイ」と呼ばれる独特の刈入れ組織があります。ユイとは、労働交換のシステムで、地域・血縁共同体の中でお金ではなく労働力を貸し借りするもので、サトウキビ農家一〇〜一五戸ほどの組があり、島全体で一七組が組織されていました。しかし、島の過疎化、高齢化が確実に進む中で、労働力の確保は厳しくなってきたため、近年は島外の若者が援農隊として来ています。サトウキビの収穫シーズンはたくさんの方がやってきて、夜になると島の居酒屋は活気にあふれることになります。

ところで砂糖の内外価格差は大きく、甘しや糖で三・九倍に及びます。この価格差を埋めるため関税と外国産糖の輸入に伴い徴収される調整金による国境措置が設けられています。粗糖の関税と調整金を合わせた実効税率は1kgあたり七一・八八円です。一方、さとうきびの生産者に対しては甘味資源作物交付金が公布されています。生産者の収入は製糖工場での買取価格とこの交付金の合計となり、二〇一〇年のサトウキビ農家の収入はトンあたり二二、二九二円（甘味資源作物交付金：一六、三二〇円、原料取引価格：五、九七二円）でした。なお、交付金は糖度一四・四度を〇・一度上回る毎に一〇〇円を増額、逆に一三・三度を〇・一度下回ることに一〇〇円減額される仕組みになっています。

### (3) 果実類

瀬戸内海の多くの島では、一九六〇年代から温州ミカンや伊予柑などの換金作物の栽培が始まった。

瀬戸内海の多くの島では、一九六〇年代から温州ミカンや伊予柑などの換金作物の栽培が始まりました。折からの高度経済成長を背景として国民の所得が向上、食の多様化が進み、柑橘類の消費が拡大、島のミカン栽培農家は大いに潤いました。瀬戸内海のほとんどの島で温州ミカン、八朔、伊予柑などが栽培されました。中島(愛媛県)を中心とする忽那諸島の伊予柑はマル中ブランドとして日本一の折り紙がついたものでした。しかし、果物消費の多様化やオレンジの輸入自由化の波が産地を襲い、温州ミカンの消費は低下、需要の減少は単価の下落につながり、柑橘類の農家は徐々に淘汰されていきます。

生き残りを図った農家は、柑橘類の品種の多様化を進めました。中晩柑類のセトカ、マドンナ、ハルミ、カラマンダリンなど一〇種類以上の品種が現在栽培されるようになっていきます。小さい島ながら、果樹園を荒らさずに頑張っている例を紹介しましょう。面積〇三二六平方キロメートル、人口五〇人の釣島(愛媛県)です。釣島は山の上まで全島が柑橘類の段々畑です。しかも、隣の興居島(愛媛県)にも畑を購入して船で通って耕作しています。

このように産地が変貌するなかで、「青いレモンの島」をキャッチフレーズに島を



山の上まで柑橘類の段々畑が続く釣島(愛媛県)



特産のレモンの六次産業化を図る岩城島(広島県)

売りだしているのが岩城島（愛媛県）です。岩城島では一九六〇年以降、温州ミカンや八朔がつくられていましたが、単価が下落し、農家の経営は低迷します。一九八〇年に島おこしの一環としてレモン栽培の導入を決定、栽培面積を増やしてきました。二〇一三年度のレモン生産農家は八五戸、栽培面積は一四ヘクタール、生産量は一六八トンでした。一九八五年には第三セクターの「いわぎ物産センター」を設立し、レモンジュース、ママレード、レモンカードなどのレモン加工品をつくり、六次産業化に努めています。さらにレモンの搾りかすを島内で飼育する豚の餌として与え、豚の糞は発酵させてレモンの肥料に、といった物質循環を島内で形成しています。レモンの搾りかすを餌にした豚は「レモン豚」という名称で商品化され、岩城島周辺のホテルやレストランで食べることができます。私も上島諸島に滞在中、ポークソテーや岩城ラーメンの具、角煮を食べましたが、柔らかく美味しい豚肉でした。

柑橘類以外では、佐渡島（新潟県）のおけさ柿は有名ですし、祝島（山口県）や興居島（愛媛県）のピワ、また琉球列島では、近年はマンゴーなどの栽培が盛んになっています。オリーブの一大産地である小豆島（香川県）にならって、松島（佐賀県）のようにオリーブ栽培を島おこしに導入した島もあります。

#### （４） 花卉類

花卉類のうち古くから島を代表する換金作物だったのがユリの球根

花卉類のうち古くから島を代表する換金作物だったのがユリの球根でした。沖永良部島（鹿児島県）はエラブユリ、甑島（鹿児島県）はカノコユリを明治時代から外国に輸出し、貴重な現金収入源でした。

島は流通条件が悪いため花卉類の生産はハンディキャップを抱えています。しかし、このハンディキャップを乗り越えて花卉が大きな収入源となっている島の例として、八丈島（東京都）、沖永良部島（鹿児島県）、伊江島（沖縄県）があげられます。

八丈島はフェニックス・ロベレニーという植物の切り葉を生産しています。長つたらしいのでロベと呼ぶことにしますが、このロベの生産額は約一〇億円で、八丈島の農産物全体の半分以上を占めています。また、東京都中央卸売市場におけるロベのシェアは枚数ベースで九割以上を占めています。ロベは和名を親王椰子といい、もともと八丈島にはなかった植物です。一九二〇年にロベを積んで横浜から小笠原に向かう船が時化のために八丈島に寄港した時に雌雄二株が八丈島の檜立地区に仮植され、この株から増えた種子が八丈島のロベのルーツという全く偶然の産物でした。戦後間もなく観葉植物として注目され、その後切葉として出荷され現在に至っています。他産地では葉が大きくなるのに対し、八丈島と青ヶ島のロベは花屋が使いやすい小さな葉が



八丈島（東京都）で育っている口べの原種



沖永良部島（鹿児島県）の電照菊の畑

特徴で、競合産地が少なく、しかも切り葉なので水に漬けておけば萎れません。ロベの栽培は隣の青ヶ島でも始まっています。

琉球列島の島々はサトウキビのモノカルチャーが進みました。耕種を多様化することは市場リスクを分散する上で重要な課題になっています。沖永良部島はサトウキビへの依存から脱却すべく花卉栽培に力を注いできました。二〇一二年の農業生産額は八二億円でしたが、そのうちの三〇億円は切り花です。ちなみにサトウキビは一〇億円にすぎません。切り花の代表は電照菊で、この他にソリダゴ、ユリ、グラジオラスなどを出荷しています。また、伊江島では沖永良部島と同様、電照菊を栽培しています。

### (5) イモ類

島で栽培されているイモ類は、サツマイモ、ジャガイモ、サトイモです。サツマイモは自給農業の代表的な耕種でした。換金作物としては焼酎原料として鹿児島県を中心に栽培されています。ただ、沖縄県や奄美群島では病害虫の関係で島外に出荷できないために、自給的に栽培されているにすぎません。

ジャガイモは徳之島（鹿児島県）や沖永良部島（鹿児島県）が代表的産地です。両島は、冬季の温暖な気候を利用して早出しの産地として生産量を着実に伸ばしてきました。両島のジャガイモの収穫は二月ごろです。この時期は、関東地方でようやく種

島で栽培されているイモ類は、サツマイモ、ジャガイモ、サトイモ

沖永良部島は奄美群島の中では脱サトウキビをめざし、農作物の多様化が進められている

イモを植える時期ですし、主産地の北海道は雪に埋まっていますが、奄美群島はこの時期に出荷できる強みを活かしています。品種は出島、農林一号、ニシユタカなど暖地性種です。ちなみに徳之島の場合は畑地生産額の三分の一を占める二二億円です。また、なお伊万里湾の黒島（長崎県）でもジャガイモが栽培されています。沖永良部島では一九七〇年代からサトウイモの栽培も始まり、本土へ出荷されています。この沖永良部島は奄美群島の中では脱サトウキビをめざし、農作物の多様化が進められています。

## （6）野菜その他

津堅島（沖縄県）はキャロットアイランドを標榜し、ニンジン栽培に力を入れてきました。復帰後に県営畑総事業で、九二ヘクタールの耕地が整備されたのをきっかけにニンジン栽培が奨励され、耕地のほとんどでつくられています。一九九〇年代前半には生産額は一億円を超えていましたが、その後単価が暴落、現在は半減しています。後述するように津堅島はモズク的一大産地となり、ニンジンを凌駕するようになっていきます。

喜界島（鹿児島県）はサトウキビの産地ですが、サトウキビだけに農業生産を依存することは危険なため、耕種の多様化の一環として二〇〇四年ごろから白ゴマの栽培に力を入れています。二〇一一年の白ゴマの栽培面積は八五ヘクタール、生産農家は二五〇戸以上になりました。年間五五トンを生産、生産額は一・二八億円になり、サトウキビ、牛生産に次ぐ作物になりました。わが国のゴマ生産量は約二〇〇トンですので、喜界島は日本一のゴマの産地です。ちなみにゴマの輸入量は一六・四万トンですので、需要量の九九・九％を輸入品に依存しています。

島は落花生に合う土壌のところが多いようで、貴重な油脂源として落花生がつくられてきました。小値賀島の属島の納島（長崎県）や沖の島（高知県）などでは特産品になっています。

柑橘類が生産過剰なことから他の作物に転換しているところの例としては津和地島（愛媛県）のタマネギ、女木島（香川県）のニンニク、佐木島（広島県）のワケギなど

柑橘類が生産過剰なことから他の作物に転換しているところの例としては、津和地島（愛媛県）のタマネギ、女木島（香川県）のニンニク、佐木島（広島県）のワケギなどがあります。また、ポスト葉タバコとして転作が進められたのが、萩諸島の相島（山口県）の西瓜、大島（山口県）のブロッコリー、見島（山口県）のキュウリなどです。島は周囲を海水に囲まれているため温暖です。このため、早期出荷が可能なエンドウやソラマメなども比較的多くの島でつくられています。

また、島ならではの野菜の代表ともいえるのが伊豆諸島のアシタバです。イノシシの被害を受けないツワブキを栽培しているのは加唐島（佐賀県）です。

島は海を隔てて隔離された環境にありますので、花粉の交雑を防止できます。このため、野菜の種の採取地になっています。朴島（宮城県）では地方品

種の仙台北菜を二戸の農家が榎渡辺採種場から委託されて種をつくっています。白菜はアブラナ科で交雑の可能性が高いため、純血を守るためには島が適していたのです。同様に飛島（山形県）では山形青菜せいさいという高菜の一種の地方品種の種が作られています。

## （7）畜産業

わが国の肉牛の生産は、繁殖農家と肥育農家に分業化されています。肥育農家は繁殖農家から子牛を購入して、育てて出荷します。

島の代表的な畜産業は黒毛和牛の繁殖です。和牛の繁殖は、琉球列島、五島、奄岐、さらに山口県日本海側の離島や隠岐などで営まれています。沖縄県の離島の子牛出荷頭数は一・四万頭（二〇一一年）、奄美諸島は一・五万頭（二〇一二年）でした。五島列島や奄岐、その他の島の生産を合わせると、五万頭ほどになると推定されます。二〇一四年のわが国の肉用子牛の出荷数は三三・四万頭なので、島はわが国の肉用子牛の一五%ほどを担っていることとなります。

農業機械が普及する以前の一九六〇年代前まで、牛はもともと使役用に飼われていましたので、農家は牛の飼育技術やノウハウをもっていました。一方、島は山地が多く、放牧地として利用するのが適していたこともあり、島で牛を飼うのが盛んになっ

たと思われます。特に子牛の生産は生後一〇ヶ月ほどで現金化できることから資金の回転が速く、リスクが少ない点も有利でした。さらに子牛生産が盛んな九州、沖縄の離島は温暖で牧草もよく育ちます。

黒島（沖縄県）は牧草の成長が早く、年間六回転するそうです。北海道は寒冷で牧草の成長が遅く、年二回転と言われていますので、生産力は三倍になります。この黒島は隆起サンゴ礁の島で、標高の低い平坦な土地が広がっていますが、島のほぼ全域が牧草地になっています。六四戸の農家が年間約一〇〇〇頭の子牛を生産しています。黒島では大正時代にサトウキビ栽培が導入されました。しかし、たび重なる干ばつ被害、砂糖に煮詰めるための燃料（木）不足、労働力不足から次第に衰退し、サトウキビは栽培されなくなりました。代わってタマネギや葉タバコが導入されましたが、うまくいきませんでした。この苦境を打破すべき導入されたのが草地畜産だったのです。一九七二年に牧草地が造成され、一九七五年には西表島からの海底送水管が完成、灌漑施設も整備されました。さらに一九八三年から畜産基地建設事業によって生産性の高い牧草地が造成されて今日に至っています。

鹿児島県の三島村は、竹島、硫黄島、黒島の三つの島で構成され、人口は四〇〇人ほどです。この三島の主力の産業は黒毛和牛の繁殖です。このうち竹島は文字通り島全体がリュウキュウチクという竹（正式には笹）で覆われています。かつてこの竹は塗り壁の下地に組む小舞竹として出荷されていましたが、やがて需要がなくなり、今

黒島（沖縄県）は牧草の成長が早く、年間六回転。北海道の生産力の三倍

ではせいぜい筍がお金になるだけになってしまいました。この島で驚いたことは竹林に牛が放牧されて、竹を餌にしていたことでした。反芻胃を持つ牛は、共生する微生物によって食べた餌が分解・吸収され、この微生物を栄養としている、つまり人間のように入れた餌そのものを分解・吸収しているのではないことは若い時に本で読んだことがありましたが、まさか微生物の餌が竹でもよいとは想像の域を超えていたのです。もちろん畜産団地も整備されていて、牧草地も造成されつつありますが、竹が餌になるとは初めての発見でした。二〇一四年に私が訪れた時、島内の牛飼いの農家は六戸で、飼育頭数は九六頭、子牛販売の収入は二〇〇〇万円ほどでした。

大きな島では農業生産の多くを子牛の繁殖が占めていますが、この他に小値賀島(長崎県)や粟国島(沖縄県)は畜産が農業生産の半分を占めています。

繁殖農家は近年急速に減っており、供給量が減少し、単価が上昇。経営状態は比較的良好となっている。

ところで繁殖農家は近年急速に減っています。このため黒毛和牛の供給量が減少し、単価が上昇、一頭あたりの価格は六〇万円以上になっているようで、島の繁殖農家の経営状態は比較的良好になっています。

現在は牧草地だけになっていますが、隠岐・島前の西ノ島や知夫里島(島根県)ではかつて「牧畑」と呼ばれる農業と牛の放牧を組み合わせたいわゆる耕牧輪転農業が営まれていました。耕作と放牧が輪転する土地利用方式で山を四区画に分け、「空山」(耕作せずに年中放牧地として利用)、本牧(麦を主として栽培し、大豆、小豆も栽培)、粟山(粟、稗、牧草を主として栽培)、空無山(空気がない山で年中耕作されている

牧畑)の順に利用形態を輪転させたのです。知夫里島の場合は、山を西牧、東牧、中牧、居島牧と呼ぶ四区画に分けていました。牛がこの区画を越えて侵入できないようにするため、「ミョウガキ」と呼ばれる石垣がつけられました。空山では土地を休め、牛や馬の糞尿が肥料となり、翌年本牧として麦を栽培したのです。江戸時代から続くこの土地利用のローテーションは知夫里島の場合、一九六七年に完全に消滅しています。なお、牧畑内の耕地は個人の所有地でしたが、放牧は土地所有権とは関係なく島民が平等な放牧の権利を有していました。つまり放牧は島民の共有地としてあつかわれていたのです。

少し変わった例として焼尻島(北海道)のめん羊

島の畜産業は子牛の生産以外に見るべきものではありませんが、少し変わった例として焼尻島(北海道)のめん羊にふれておきます。焼尻島は羽幌港から約二五km沖に浮かぶニシン漁で発展した島です。羽幌町はポストニシン対策として一九六六年にめん羊牧場を開始、紆余曲折を経て現在まで続いています。漁師の不漁対策で導入したのですが、漁師には馴染まず、第三セクターで運営してきました。その後二〇〇八年に民営化されています。二〇一四年に訪れた時、五〇〇〜七〇〇頭のサフォーク種(ラム肉用)を飼育し、年間約二〇〇頭を出荷していました。増毛町出身の料理家・三国シェフが注目してから焼尻島のラム肉の評価が高まり、今ではなかなか手に入らないといえます。ただ、一頭一〇万円程度ですので、仮に年間三〇〇頭を出荷したとしても三〇〇〇万円、島の漁業生産額は三億円ですから、これにははるかに及びません。



隆起サンゴ礁の島・黒島（沖縄県）の放牧風景



今も残る知夫里島（島根県）のミョウガキ

## （８）林業

伊豆諸島の御蔵島（東京都）でのツゲ

島では林業はほとんど発達しませんでした。特殊な例はいくつかあります。屋久島（鹿児島県）の屋久杉があまりにも有名ですが、ここで取り上げるのは伊豆諸島の御蔵島（東京都）です。御蔵島はツゲの産地です。印材として御蔵島産ツゲの評価はきわめて高く、今でも最高級品に位置づけられ、普通のはんこ屋では入手困難です。御蔵島は風が強いためツゲの木の成長が悪く、一〇〇年かかっても直径一〇cmほどしか成長しないのです。成長が悪いということは逆に木目が詰まっています。堅いので、このことが最高級品たるゆえんです。天然のツゲは全島民の共有財産で江戸時代から島の重要な現金収入源となっていました。ツゲと並ぶのがクワです。御蔵島のクワは仏壇、家具、お盆などの用材として江戸に出荷されていました。また、大正、昭和の即位の大典ではお召列車の装飾用に御蔵島からクワが送られています。

島は周囲を海水に囲まれているので相対的に暖かく、ツバキが多いのが特徴です。代表的な椿油の産地が伊豆諸島の利島（東京都）と大島（東京都）です。椿油は大島ブランドが浸透していますが、日本一の産地はじつは利島です。利島では一八世紀から椿油の生産が行われ、樽に詰めて江戸に送られていました。二〇〇九年には三〇キロリットル、〇・七億円を生産しています。利島の農林生産額の八割を占める重要な

対馬（長崎県）や隠岐諸島の島後島（島根県）では椎茸栽培がさかん

産品です。五島列島でも椿油がたくさん採れ、五島うどんには椿油が使われていますし、例えば地島（福岡県）をはじめ、椿油を島の特産品にしているところが増えてきました。

キノコ類では、対馬（長崎県）や隠岐諸島の島後島（島根県）で椎茸栽培がさかんです。また、瀬戸内海の島々や琵琶湖の沖島（滋賀県）などでは山にアカマツが生えており、たくさんマツタケが採れた時代がありました。私も四〇年ほど前に大崎上島（広島県）に一週間ほど滞在した時、宿で毎日マツタケを出されたことがありました。人生でこれほどふんだんにマツタケを食べることができたのは後にも先にもこの時以外ありません。しかし、松林の松葉の利用が後退し、山の腐葉土化が進むと、松は枯れ（直接的には松くい虫の被害ですが、松は植生遷移からみるとパイオニアスピースでやせた土地に生える植物ですから、土地の腐葉土化が進むことによって松は消え去る運命にあります。それを防止するためには人間が人為的に腐葉土化を防止する、つまり松葉を取り除き利用することが必要なのです）、マツタケは採れなくなってしまうました。

以前は竹が現金収入源になった時代もありました。粟島（新潟県）の例を紹介しておきましょう。粟島の対岸は穀倉地帯の新潟平野です。昔は今のようコンバインで脱穀せず、収穫した稲は「はさ掛け」して、天日干しにしました。マダケはこの「はさ掛け」用に大きな需要があったのです。新潟平野には竹が乏しく、当時マダケは粟島と佐渡島に限られていました。粟島は重要なマダケ供給地だったので。粟島からのマダケの出荷量は二〜三万束（一束は竹の太さによって本数が異なりますが、五〜六寸の竹ですと八本を一束にしました）に及んだそうです。つまり年間二〇万本にもなります。しかし、コンバインの普及によってマダケの需要は急速になくなりました。粟島からのマダケの出荷は一九七〇年代にほぼ終わったようです。

## 三二．漁業・養殖業

### （1）漁師のいない島はない

島は海に囲まれているので、周辺には必ず水産資源があります。一方、水産資源は貴重な現金収入源でしたから、島民の多くは農業のかたわら漁業にも従事しました。つまり島の暮らしは半農半漁が基本だったので。島の条件や歴史的背景、集落の成り立ちなどから主農従漁、あるいは従農主漁だったり、その程度には差がありました。が漁業はどの島でも大なり小なり行われていました。

冷蔵庫や満足の流通手段がない時代でも、海藻類は乾燥、魚介類は塩蔵、煮干や素干、あるいは節に加工して保存性を高めました。特に海藻類の販売収入は集落の共通費用をまかなう貴重な財源だった島も多くあります。

島の暮らしは半農半漁が基本だった

わが国は高度経済成長を経て、より一層「お金」を必要とする時代になりました。この結果、農業は自給的生産から換金作物へと大きく転換せざるを得なかったことは先に書きましたが、漁業は最初から現金を稼げる産業でしたから、土地が狭く農業では換金作物化が難しかった島、一方では海の資源が比較的多く期待できる島では漁業振興に活路を求めたのです。

私はこれまでに一七〇の島を見ましたが、どの島にも漁師がいました。一つだけ例外がありました。それは、**佐木島（広島県）**です。船はありますが、漁業をする人はいないのです。ただ、海の資源を全く利用しなかったかということ、そうではなくアマモやホンダワラなどの海藻・草類は刈り取って肥料として利用していました。しかし魚介類は獲りませんでした。この島には漁協の組合員もいませんし、漁港もありません。島内の港は全て地方港湾になっています。

島の向田地区の港に「摩崖利霊石地蔵」という巨石が海の中に置かれていて干潮時には顔を出します。七〇〇年以上前からこの場所に建っているそうです。この地蔵には「東西南北各於一丁尽未来際殺生禁断」と書かれていて、この地蔵を中心に一丁四方を殺生禁断の地としたのです。宮本常一は一九五〇年に佐木島を訪れていますが、この時地元の人が、「この島は昔から漁師はいなかった。この島は殺生禁断であった。このあたりは平重盛の領地で重盛が禁じた」と話したと紹介しています。この島は小早川氏の領地だったので、重盛は茂盛の誤りで、「殺生禁止」の一丁を島全体に拡げ

たというのが宮本の解釈でした。

戦後間もなく佐木島は「新生農村建設計画」を策定しますが、その中に他種産業の開発（水産計画）があります。漁業を導入して島を活性化しようと考えたわけですが、この計画は全く実現しませんでした。島の人は伝統的に「狩猟」に関心を示さなかったのです。この点を郷土史家の山下博巳さんに尋ねましたが、一丁四方（一〇〇m四方）ばかりの禁漁範囲を島全体に拡げて漁業が発達しなかったのはどうもおかしいと言っておられました。何か別の理由があるものと思われませんが、興味深い課題です。

## （2）海に背をむけた島

宮本常一は、かつて「海に背を向けた島」という概念を示しました。

「元来島は、佐渡や淡路のように大きなものを除いては、いずれも食糧その他の自給度が低くて、交換経済にたよらざるを得ない。その交換物資のもっとも重要なものが水産物であった。ところが、漁船が動力化し、大型化して来ると、本土の漁船が魚を追って離島の周辺にやって来てとっつてしまうようになった。しかし、島民はどうすることもできない。彼らは漁船を大型化することができない。資本もなければ船をつける港もない。そのため海にとりまかれつつ海に背を向けなければならなかった。鹿児島県の薩南十島や甕島、伊豆七島のうちの大半の島がそれである」

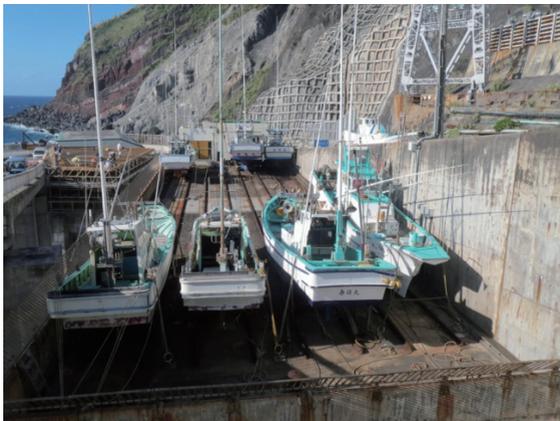
つい最近までわが国の漁港の整備は遅れていた

外洋離島の火山島の中には海食によって断崖絶壁が続き、入江も、浜もない島が多くみられます。宮本が書いているように伊豆諸島の利島、御蔵島、青ヶ島（東京都）や南西諸島の竹島、硫黄島（鹿児島県）はその典型です。これらの島々は、つい最近まで大型船が係留できる岸壁もなく、舢に依存していました。漁船は条件の悪い玉石の浜に引き上げなければなりませんでしたので、漁に行くのも大変で、もちろん大きな船は持ってませんから、操業範囲も狭かったのです。

今でこそ、漁港の過剰投資が指摘されていますが、つい最近までわが国の漁港の整備は遅れていました。離島の体験ではなく本土での実体験をお話しましょう。私は若いころ、漁船をチャーターして海洋調査の仕事をしていました。北海道電力の伊達火力の環境調査で伊達漁港から船を出した時のことです。今のような立派な漁港はありませんでしたから、漁師は砂浜に枕木を並べ、そこに魚の油を塗って船を滑らせて海に出ました。船を滑らせている間に飛び乗らなければなりませんので、タイミングが悪く乗りそこなうと海に落ちてびしょぬれになります。冬の海でこうした事態に遭遇した調査マンもいて悲劇でした。また、仕事を終えて船が戻ると、水に浸かって漁船の側面にあるフックにワイヤーロープをかけてウインチで船を巻きあげました。この時は既に電気が使われていましたが、電気のない離島ではカグラサンを使って人力で巻きあげなければならなかったのです。つい四〇年ほど前の話です。その後、国家財政が豊かになり、公共事業が盛んになると、こうした環境は解消されましたが、急深



漁船を引き上げるのに使用する巨大なクレーン（青ヶ島・東京都）



陸上に引き上げられた漁船（青ヶ島・東京都）

かな外洋離島では工事費がかさみ、未だに整備は遅れています。

青ヶ島（東京都）は、現在噴火によって形成されつつある西之島新島と同様、海底火山の噴火によってできた島です。長年の波浪による海食で島の周囲は崩れ、断崖絶壁で囲まれています。そして今でも崖崩れが続いています。海に出るにはけわしい崖道を下らなければならず、また海岸に浜もありませんでした。この青ヶ島では、一九五七年から東京都によって港湾工事が進められ、二〇〇〇年五月に一七〇mの突堤が完成、大型貨客船の直接係船が可能になりました。現在も防波堤に囲まれた港湾はありません。ただ、荒海に一本の突堤が突き出ているだけです。島の八隻の漁船は巨大なクレーンで船体を吊り上げ、陸上に置かれています。漁船は出漁の都度、クレーン操作をして降ろし、漁が終われば引き上げなければなりませんので大変な労力を要します。港湾工事は現在も進められていますが、岸壁からすぐに漁船に乗れるようになるのはいつの日のことやらわかりません。

### （3）資源を求めて渡った島

#### ① ニシン

日本海側に浮かぶ天売島（北海道）はニシンを求めて和人が移住した島です。先住民族はアイヌでしたが、明治初期に和人が定住しはじめました。一八七五年に島に住

ニシンを求めて和人が移住した島

んでいた人は六戸一人でしたが、一九〇二年には三三三戸一四二一人に増加します。ニシンが姿を消す一九五七年までほぼ一世紀にわたって島の経済はニシンに依存していました。

ニシンは三月下旬から四月にかけて回遊してくる春ニシンです。建網（定置網）と刺網でニシンを獲りましたが、建網の場合は一ヶ統あたり二七〜二八人が働いていましたので、短期間に大勢の労働力が必要でした。ニシン漁の時期は秋田、青森、道南などから「ヤン衆」と呼ばれる季節労働者で島の人口は膨れ上がりました。

しかしニシンが消えた後、規模の大きい漁業である建網業者には膨大な借金と遊休固定資産が残されました。一方、刺網漁師は借金が比較的少なく、磯まわりの浅海漁業に転換することになります。ニシンに代わる水産資源として最も重要だったのがアワビです。一九六〇年代は年間五〇トンものアワビが漁獲されました。しかし乱獲が原因か定かではありませんがアワビは激減（現在はほとんど獲れません）、続いてウニ類を漁獲対象とし、現在は刺網、タコ箱、ナマコ桁曳などの漁業がメインとなっています。ニシンの規模を補う代替資源はありませんでしたが、一定程度島民を養える資源があったことから、三五〇人を超える人口が維持されています。天売島と隣り合わせの焼尻島（北海道）もニシンに大きく依存した島でした。

#### ② 鯨

小川島（佐賀県）の漁港背後の高台には捕鯨が盛んだった時代に建てられた「鯨見

ニシンに代わる水産資源として最も重要だったのがアワビ

張所」という七坪ほどの建物があります。この建物は大正初期のもので、佐賀県の重要有形民俗文化財に指定されています。この場所から島の周囲に回遊してきた鯨を監視していました。鯨は冬に小川島周辺に回遊してきました。鯨の漁期は一三五日ほどだったといえます。鯨を発見すると、海上にいる勢子船（鯨を追う船）に旗で連絡しました。旗の揚げ方で鯨の位置を知らせたのです。小屋の中には当時の捕鯨の様子を書いた絵が掲げられていますが、小川島周辺ではシロナガス、イワシ、セミ、ザトウ、コク、ナガスなどのクジラが漁獲されました。当時の鯨組には水夫や鉋を打つ波座士、解体処理にあたる作業員など五〇〇人ほどが働いていたそうですから、捕鯨は島の大産業でした。

小川島を基地とする捕鯨は、唐津藩主寺沢志摩守が一五九四年に紀州・熊野灘から漁夫を雇い、突取法で始めたのが嚆矢

小川島を基地とする捕鯨は、唐津藩主寺沢志摩守が一五九四年に紀州・熊野灘から漁夫を雇い、突取法で始めたのが嚆矢でした。その後唐津藩の保護のもとで網取法が導入されて発展します。唐津藩主水野家の時代になると、呼子の中尾組が約一九〇八年八代にわたって捕鯨業を経営しました。しかし、次第に鯨の資源が減り、中尾組は一八七七年に捕鯨業から撤退します。

中尾組の撤退後、捕鯨業の伝統は地元有志が設立した小川島捕鯨組に継承され、小川島捕鯨会社を経て、一八九九年には株式会社になりました。一九〇八年にはノルウェー式捕鯨が大東捕鯨との共同経営で始まり、その後大洋捕鯨、さらに日本水産との共同経営を経て、一九四九年に捕鯨は終焉し、小川島捕鯨(株)も解散します。小川島

の捕鯨業はミンククジラを対象とした個人経営へと引き継がれ、一時期は西日本随一の規模を誇りましたが一九六一年をもって小川島の捕鯨はピリオドが打たれました。その後、小川島の漁業はイカ釣りに代わり、現在は活イカの供給基地として独自の地位を築いています。

**小値賀島（長崎県）** 周辺で捕鯨が始まったのは、寛永年間（一六二四～一六四三年）に紀州藤代の住人藤松半右衛門が船一三隻で平戸の**度島（長崎県）**にきて捕鯨を始め、のちに属島の六島を根拠地としたとされています。この藤松家の屋敷は小値賀島本島の前方郷に残っていて、現在この古民家は改装されて趣のあるレストランになっています。また、本島の笛吹郷にある小値賀町歴史民俗資料館は、小値賀島で捕鯨を始めて財をなした小田家の旧邸を活用したものです。小田家は藤松家より少し遅い一六八四年に杵岐（長崎県）から移住して捕鯨を始め、新田開発や酒造り、廻船業などを営む有力者になりました。

鯨は一頭で数一〇トンにもなるのできわめて効率のよい漁獲物でした。鯨は巨万の富と地域雇用をもたらしたのです。このため鯨の回遊経路にあたる五島列島や玄界灘、さらには見島などの山口県日本海側の島々では捕鯨がさかんでした。それぞれの島には獲る技術と資本がありませんでしたので、捕鯨の先進地である紀州方面から人々が鯨を求めて島にやってきました。

鯨は一頭で数一〇トンにもなるのできわめて効率のよい漁獲物で、巨万の富と地域雇用をもたらした

坂越の漁師が一六六七年にイワシを求めて移住した島

### ③ イワシ

青島（愛媛県）は現在の兵庫県赤穂市坂越の漁師が一六六七年にイワシを求めて移住した島です。青島の漁業は庄屋を網元とする集団操業によって発展、明治期に入ると二ヶ統のイワシ網が島民に売却されて共同経営となり、さらに一八九一年にはタイ縛り網が導入されました。タイ縛り網の漁期は四〜六月、イワシ網は七〜一〇月でした。最盛期には島民一八〇人が両漁業に従事し、この二つの漁業が島の経済を支えていたのです。しかし、タイ網は採算に合わなくなり一九五五年に休止、翌年からイワシ網もイワシ資源の減少から不漁が続くようになり、この不況を打開するため島ではナイロン網に切り替え中型まき網漁業に転換しますが、二ヶ統のうち一ヶ統を一九六〇年に、残りを一九六六年に廃止し、イワシ漁からも撤退しました。漁業の不振は島を直撃します。代替産業はありませんでしたので、その後島は衰退の一途を辿り、最盛期には八〇〇人を超えていた島の人口は二〇一四年現在で一七人となり、いまや「島民一五人、猫一〇〇匹、猫の楽園」として紹介される過疎の島になってしまったのです。

### ④ カツオ

与那国島（沖縄県）の経済の一時代を担ったのがカツオ漁と鰹節製造でした。島には祖納、比川、久部良の三つの集落がありますが、鰹節工場が置かれていたのが久部良です。与那国町史によると、「与那国の鰹漁業は一九〇一年、鹿児島県出身の寺前

嘉次郎が、奄美大島を経て与那国を訪れ、クリ船一〇隻くらいで曳縄鰹釣り漁業を行なったことに始まる」とされています。その後、鹿児島県人や糸満の漁船も加わり、与那国島はカツオ釣りの島になっていったのです。さらに一九二〇年ごろ、実業家の発田貞彦が久部良に製氷施設を有する近代的な鰹節工場を設立しました。最盛期の一九三五年には漁船二三隻、漁民一五〇人、加工場の従業員は五〇人を要したそうです。この加工場は一九六〇年代まで続けられましたが、やがて冷凍技術の進歩によって産地での加工が不要になり、与那国島から鰹節工場は消えました。

南方のカツオは脂肪含有率が低く、節の原料として優れていました。また、船に冷凍施設がない時代は、新鮮なカツオ原料から鰹節をつくり、保存食にして運搬する必要がありましたから、現地での加工が不可欠でした。したがって、脂肪が少ないカツオが回遊する西日本では各地に鰹節工場がありました。尖閣列島もその一つで、戦前は鰹節工場が置かれていました。原料が冷凍できるようになると鰹節の産地は焼津、枕崎、山川に集中するようになったのです。

### ⑤ アワビ

輪島市の北、約五〇kmに位置する孤島・舳倉島（石川県）は、輪島市海士町の人たちによって季節的に利用されてきた島です。海士町のルーツは現在の福岡県宗像市鐘ヶ崎です。永禄年間（一五五八〜一五六九）に鐘ヶ崎の海人が時化にあつて能登半島に漂着し、アワビの好漁場であったことから輪島のすぐ西の光浦というところに小

南方のカツオは脂肪含有率が低く、節の原料として優れていた

屋掛けし、夏に操業、冬になると鐘ヶ崎に帰るといふ生活を続けていました。そのうち、加賀藩主・前田利家が地方巡視した折に、海人たちが熨斗鮑を献上して、この地に漁業権を得たいと申し出ます。本土の地先海域は地元の漁師が利用しているので許されず、輪島の沖にある七ツ島と舳倉島でアワビを獲ることが許されました。その後、一六四九年に前田利常に「土地拝領願書」を差し出し、現在の海士町の土地を拝領しました。

輪島から約五〇kmも離れている島に当時の帆船で通うのは現実的ではありません。そこで海士町の人たちは、アワビの漁期（五〜九月）は「島渡り」と称して海士町そのものが舳倉島に移住したのです。しかし、戦後、アワビ以外の網漁業などが導入されたこと、漁船の動力化と大型化によって舳倉島まで二時間かからずに行けるようになったことから、一斉に島に渡ることはなくなり、季節的に定住する海女と輪島から通勤する海女に現在ではわかれていきます。またアワビの資源量が低下し、現在はサザエが漁獲の中心になっています。

#### ⑥ その他

沖縄県の糸満漁師は、奄美群島から先島諸島まで多くの島に移住し、現地の漁業に大きな影響を与えました。例えば、喜界島（鹿児島県）の漁業は糸満漁師の進出によって始まったのです。明治の終わりに進出した糸満漁師はクリ船を持ち込み、追込漁などの漁法を伝えました。

糸満漁師と同じように西日本各地に漁港を伝えたのは広島県の能地を中心とする家船に代表される移動漁民でした。例えば、鳥羽の目の前にある坂手島（三重県）は活エビを餌とするタイ一本釣がさかんですが、村山眸さんという郷土史家によると、もともと能地からきた漁師が島周辺の漁場を使わせてもらうバーターで釣りの技術を伝えたのだといえます。

以前五島栽培漁業センターからクエの生産流通の調査を頼まれて、長崎県内でクエを獲っている浜をくまなく回ったことがあります。対馬（長崎県）の水崎（豊玉町）集落は対馬でいちばんクエ延縄のさかんなところですが、この集落の祖先はみな広島県からの移住者でした。明治時代に魚を求めて移住してきたのです。対馬には延縄の技術はありませんでしたので、広島の出身者が延縄を伝えました。同様に、壹岐（長崎県）の初瀬という集落もクエ延縄を営んでいます。やはり広島県からの移住者でした。広島は漁師は高い漁撈技術をもって資源の豊富な東シナ海に展開していったといえます。

瀬戸内海と紀伊水道の境にある伊島（徳島県）は潜水漁業の発祥の地として知られています。岡田一郎さんの「伊島風土記」によりみると、漁業不振と人口増加によって島の経済が破たん寸前になった時、栗田徳蔵という人が潜水漁業を導入したという。一八九〇年ごろから始まった潜水漁業は、戦前は朝鮮半島まで出漁してアワビを獲りました。戦後は瀬戸内海各地を回ってミルガイやタイラギを獲ったのです。潜水船は

対馬（長崎県）の水崎（豊玉町）集落の祖先はみな、明治時代に広島県から魚を求めて移住してきた

船頭、潜水士、綱持ち、ポンプ押しで構成され、一船に五〜六人が乗り込みました。多い時には一〇隻ほどの親方がいたそうです。

少し話は脱線しますが、この島の當所神社に、私財を島に寄付した神野知さんの立像が建っていました。神野さんは日本一のアワビ問屋・神野商店を創業した人で、大阪の泉佐野に大きなアワビの蓄養施設を保有し、全国からアワビを買い集めていた実業家です。ちょうど関西国際空港の埋立工事が始まった時でしたが、発生した濁り水がアワビの水槽に入り困っていました。私は神野さんの蓄養水槽を二回ほど調査し、濁度計を設置したことがあります。この神野さんが伊島の出身だとは知りませんでしたので、島を訪ねて大きな発見をしたこととなります。若いころに潜水漁業で獲ってきたアワビに触れていたことが後の事業につながったのだと、納得したわけです。

#### (4) 遠洋漁業に活路を開いた島

保戸島(大分県)を訪ねると、日本の典型的な漁村の家並みとはほど遠いことに驚かされます。わずか〇・八六平方キロメートルの小さな島に何しろ五〇〇戸近い世帯が住み、三階建の鉄筋コンクリートの家が林立しているのです。半農半漁の島では、島で生活できる世帯数は農地面積に支配されますが、漁業が発達し現金収入が増えれば、次男、三男も島で生活が可能です。ただし宅地の面積は限られますので、分家に

よって家が増えれば上に伸びるしかないのです。こうして「ミニ香港」と呼ばれる特異な集落景観が形成されました。

保戸島の経済を支えたのはマグロ延縄漁業でした。保戸島の漁師が島の外に資源を求めて遠征したのは一八九〇年にさかのぼります。二トンの櫓船で対馬に遠征し、カジキの突棒漁業を始めたのです。一隻に四人が乗り組み、六反の帆と四丁の櫓で荒海に漕ぎ出したのですから勇敢そのものです。一四年後には二〇隻に増加しました。カジキは春季が盛漁期のため、春季以外の時期の操業を模索していたところ、高知県土佐清水沖でピンチョウやメバチが釣れることを知り獲りに出かけましたが、両魚種は水面に浮かぶ習性がないことから突棒では良い成果があげられず、延縄漁業を導入したのです。

一九一八年には櫓船から動力船に代わり、周年操業が可能となるとともに、さらに遠くの漁場にいけるようになりました。七〜一〇月は三陸沖から北海道、一月〜翌年五月は土佐清水、紀州沖、対馬海域へと漁場を拡げました。戦前の最盛期には、保戸島のマグロ漁船は三〇〜四〇トンに大型化、漁船数は八九隻、乗組員(島の人)は一〇〇〇人を超えました。しかし戦争で多数の漁船が徴用され、乗組員のほとんども召集、島の漁業は壊滅的な打撃を受けました。終戦時に残った漁船は三隻しかなかったのです。

戦後、農林中金の融資を受けて漁協自営船を四隻建造し、戦後復興とともにマグロ

保戸島の経済を支えたのはマグロ延縄漁業だった



ミニ香港と呼ばれた保戸島（大分県）の家並み



田代島（宮城県）のかつての船主の家は新規移住者によって漁業民宿に変貌

延縄漁業は飛躍的に発展します。島の男たちは中学を卒業するとマグロ船に乗り、ピーク時の一九八〇年にはこの小さな島でマグロはえ縄漁船一六七隻、漁獲量は二万トンを超えました。また漁獲金額のピークは一九九〇年で二四〇億円に達したのです。しかしその後、漁船は減少、現在は大型船（六九〇トン）が二隻、小型船（一九トン型）が七隻になり、水揚額も二〇億円程度になっています。そして賃金の安い外国人が乗組員になっていますので、島の人は船主船長や漁撈長に限られています。

田代島（宮城県）は八興漁業や大慶漁業など、日本を代表する遠洋漁業の船主を数多く生んできた

石巻湾の沖に位置する田代島（宮城県）は三・一四平方キロメートルの小さな島ですが、八興漁業や大慶漁業など（海外まき網漁業）の日本を代表するような遠洋漁業の船主を数多く生んできました。また隣の網地島（宮城県）も同様です。ただ、保戸島とは対照的に出身の島から離れ、石巻に本社を移しているため、田代島にいたっては過疎化が進行し、五〇戸、八一人（二〇一二年当時）しか住んでおらず、高齢者の島になってしまいました。ちなみに八興漁業がつくった「ねこ神社」が有名になり、最近猫の島として観光客が来るようになっていきます。

### （5）遠洋漁業の乗組員を輩出した島

保戸島や田代島のように船主が出ると、島の人たちは乗組員として雇われました。一方、島には船主が育たなかったものの、遠洋漁業の乗組員の供給地の役割を果たし

気仙沼の沖に位置する大島(宮城県)は遠洋漁業の乗組員の供給地だった

た島も数多くあります。乗組員が稼いだ賃金が、島の経済を支えたのです。定年で船を降りると島に戻り、島の周辺で一本釣などのいわゆる「小漁師」になりました。つまり沿岸漁業と遠洋漁業は島単位で見れば密接に関係していたのです。

気仙沼は言わずと知れた遠洋漁業の基地ですが、この沖に位置する大島(宮城県)は遠洋漁業の乗組員の供給地でした。マグロ延縄やかつては北洋鮭鱒の乗組員になりました。遠洋漁業が華やかなころは、給与も高く立派な家がすぐに建ったといえます。

酒田市の約四〇キロメートル沖に位置する飛島(山形県)は、島周辺の水産資源だけでは二〇〇戸に及ぶ世帯が生活することができませんでした。明治の初めころから富山から来た出稼ぎ漁船に乗り始めたようです。北海道方面でのタラ釣、ニシン刺網、イカ釣りなどの船に乗りました。その後は二〇〇カイリで減船されるまでは鱒流し網漁船に乗り北洋で働きました。その後も中型イカ釣、大型イカ釣の漁船に乗組員として雇われました。飛島の漁師は先輩から代々漁撈技術を叩き込まれた優秀な技術者でしたから、人材を供給し続けることができたのです。しかし、沖合・遠洋漁業の衰退によって、若い人が働く場は制約され、一方沿岸の水産資源だけでは飛島の人口を養うことができませんでしたので、島から人が去っていきました。

九州では以西底曳網が島の経済を支えていました。福江島の属島の黄島、赤島、黒島(長崎県)という小さな島の男たちは何れも以西底曳網で働いたのです。以西底曳網を降りた島の男たちは島に戻り小漁師をしていました。しかし、同漁業は一九九〇

年以降年々経営体数が減り、壊滅状態になってしまいました。現在八〇歳の人は一九九〇年代に乗組員だった人ですが、こうした人たちも島には残り少なくなり、若い人は新しい仕事を求めて島外に出て行きましたから、この三つの島は無人島化の危機に晒されています。黒島は二人、赤島は一六人の島民のうち過半数がＩターンの移住者、黄島は最盛期に一〇〇〇人を超えていた人口はわずか四七人に減っています。

## (6) 沿岸漁業の盛んな島

坊勢島(兵庫県)は面積一・二九平方キロメートルの家島諸島の有人離島の中では最も小さな島ですが、この島には八三〇戸、約二八〇〇人が住み、このうちの半分以上の四五〇戸が漁業を営む「漁業の島」です。島には造船所や鉄工所などの漁業関連産業も張り付いています。また、小学校と中学校があり、小学生は約一四〇人、中学生は約九〇人で、最も元氣な島の一つです。江戸時代後期の島の世帯数は二〇〇戸ほどでしたから、漁業の発展とともに分家し、世帯数と人口が増えたのです。人口密度はマグロ漁業で発展した保戸島をしのぎ、全国第三位の一三五九人／平方キロメートルです(二〇一〇年国勢調査時)。

坊勢島には六〇〇隻近い動力船が三つの漁港にひしめきあっています。二〇一二年に訪ねた当時の漁業生産額は、海苔養殖と船曳網がそれぞれ一〇億円、まき網が九億

坊勢島(兵庫県)は人口の半分以上が漁業を営む「漁業の島」



坊勢島（兵庫県）の漁港と家並み



大島（山口県）でIターン漁師向けに整備された市営住宅

円、小型底曳網が七億円、磯端と呼ぶ磯根漁業が三億円、その他もろもろあわせて四三億円でした。漁師一戸あたりの粗収入は一〇〇〇万円近くになります。

萩諸島の大島（山口県）はもともと台地での農業と漁業の半農半漁で生計をたてていました。島には本村と赤穂瀬という二つの集落があります。赤穂瀬は後からできた分家の集落で、農地がなかったため漁業専業になりました。この島には、坊勢島に及ばないものの、小学生が三人、中学生が一五人います。漁協の正組合員は一四四人で、島民の半分が漁業に従事しています。最近の島の漁業生産額は一〇億円で、葉タバコ、ブロッコリーを中心とする農業生産が一億円ですから、漁業の方が一桁多いのです。島の漁業は中型まき網四ヶ統、沖刺網八隻、潜水漁業、一本釣、大型定置網、ヤズ刺網、イワシ棒受網、延縄、チョウチン籠、建網など、多様です。また、島には一三人のIターン漁師がいます。このうち自営している人が三人。一番長い人では島に来てから一四年を迎えています。

## （7）養殖が主体の島

### ① カキ

松島湾に浮かぶ朴島、寒風沢島（宮城県）は種ガキの供給地として知られています。わが国の種ガキはそのほとんどを宮城県に依存していますが、松島湾は万石浦となら

ぶ日本有数の種ガキの産地です。東日本大震災で壊滅的な打撃を受けましたが、種ガキ生産は順調に回復し、現在、朴島で三経営体、寒風沢島で一〇経営体が種ガキを生産しています。なお、同じ浦戸諸島の野々島、桂島（宮城県）では種ガキの生産は行われず、簡易垂下方式でカキ養殖が営まれています。

広島湾西部に位置する阿多田島（広島県）はイリコとカキの生産が島の経済を支えています。カキ養殖は一九六八年の構造改善事業で導入されたものでしたが、戦前も営まれていて対岸の大竹にある工場排水の影響で中断した歴史があることから「再開した」という表現の方が正しいかもしれません。二〇一三年当時、九経営体がカキ養殖を営み、その生産額は八億円程度でした。むき身の労働力は島の人でまかなうことができないため、私が訪ねた時は二人の中国人研修生がカキむきに従事していました。

カキ生産県第三位の岡山県の多くを担っているのが、頭島と大府島

岡山県は広島県、宮城県に次ぐ第三位のカキ生産県ですが、このカキ生産の多くを担っているのが、頭島とその沖に位置する大府島です。頭島のカキ生産額は約八億円、島の漁業生産額の九四％を占めています。頭島では一九六一年に本土側の邑久町から技術を導入し、二七戸が営んでいます。一〇〇〇四月の出荷時期は阿多田島と同様中国人研修生がむき身作業を担い、人口三八〇人の島に七五人ほどの中国人男女が入り、この時期は活気にあふれるようです。大府島の経済を支えるのもカキ養殖で、七経営体が営んでいます。生産額は二億円ほどです。頭島と同様むき身作業は中国人



採苗用のホタテ殻を再利用するため付着物を除去する女性（宮城県・朴島）



カキ剥き作業をする中国人研修生（広島県・阿多田島）

研修生に依存していて、こちらは男ばかりだそうです。この時期は人口八〇人の島が一〇〇人ほどに膨れ上がります。

また、新潟県の唯一のカキ養殖産地は佐渡島の加茂湖です。

カキ養殖はマガキが中心ですが、最近はいワガキの養殖も行われるようになってきます。隠岐諸島では二〇〇〇年ごろからいワガキ養殖が島に普及し、現在は二億円を超える産業に育っています。中心となっているのは島前の西ノ島と中ノ島(島根県)です。しかもいワガキ養殖を担っているのは旧来の漁業者ではなく、異業種からの参入者とインターン者である点はおもしろい現象といえます。

## ② 真珠

対馬や五島列島は深い入り江が多く、真珠養殖が盛んだった

対馬や五島列島は深い入り江が多く、真珠養殖が盛んでした。真珠養殖は核入れ作業を人の手で行うことから労働集約型の産業です。このため、島に多大な雇用の場を提供していました。しかし日本の真珠養殖は一九九四年以降、アコヤガイの大量へい死をもたらず赤変病のまん延によって大打撃を受けました。その結果、高水温に強く、巻きもよいと理由から中国産真珠貝(ベニコチョウガイ)が日本に持ち込まれました。この貝は赤変病にかなりの耐性を持っていたことから、日本産のアコヤガイとの交雑貝が大量に種苗生産されるようになり、全国にハーフ貝として普及しました。これによって一時期のような赤変病による高い死亡率はなくなりましたが、越年養殖が行われなくなったことから真珠の小型化が進み、一方品質も悪くなりました。

相島(福岡県)を訪ねた時、漁港の前面海域には真珠養殖の延縄が設置されていて、船の待合室に「アコヤガイの持ち込みを禁止します」と書かれた筑前海区漁業調整委員会の大きな看板が目に入りました。じつは相島では、二〇〇七年からミキモトの子会社の(株)ミキモト博多真珠が、在来の純粹国産種であるアコヤガイ真珠の復活に挑戦していたのです。新宮相島漁協では二五年ほどまえからアワビを中間育成していましたが、この施設にアコヤガイの稚貝が混ざっているのが発見されました。島の周辺に生息しているアコヤガイの浮遊幼生が中間育成施設の取水に取り込まれたものでした。漁協では福岡県水産海洋技術センターの指導を得ながら、(株)ミキモトの協力を得てこのアコヤガイの母貝養殖を思い立ったのでした。二〇〇一年から二年間、母貝を販売したのですが、真珠不況で想定した単価で販売できず、漁協に代わってミキモトが中心となって真珠養殖が牽引されることになったのです。二〇一二年当時一九人の島民がこの事業所で働いていました。

加計呂麻島(鹿児島県)は日本で唯一のマベ真珠の産地

加計呂麻島(鹿児島県)は日本で唯一のマベ真珠の産地です。マベは殻長二〇〜三〇cmの大型の二枚貝で、国内の真珠貝の中では最も大きく、熱帯から亜熱帯に分布し、わが国では奄美大島が分布の北限です。マベ養殖が始まったのは一九一〇年のことで、当初は天然貝に依存していましたが、一九六〇年代に種苗生産技術が確立され、一九七〇年以降完全養殖の時代に入りました。当初、田崎真珠が中心になりマベ真珠をつくっていましたが、二〇〇九年に加計呂麻島から撤退したため、元社員の有志が

出資して田崎真珠から養殖施設を買い取り、「奄美サウスシー&マベパール」という会社を設立して、マベ真珠を継承しています。同社の従業員は約40人で、島最大の雇用場となっています。

英虞湾に浮かぶ間崎島(三重県)は御木本幸吉が真円真珠を開発した多徳島の南側にある島で、真珠養殖発祥の地とも言える島ですが、真珠不況の影響で島は活力を失ってしまいました。真珠養殖で潤った頃の間崎島は島外から働きに来た人も多く、戦後は小学生だけで二〇〇人もいたことがあるそうです。しかし、現在、真珠の区画漁業権を有する家は四〇軒ほどですが、次の漁業権更新時には二〜三軒に減るだろうといわれています。

#### ③ モズク

津堅島(沖縄県)は「キャロットアイランド」を標榜し、島の畑地には一面ニンジンが栽培されていますが、じつは現在の津堅島を支えているのはモズク養殖です。津堅島は本島の恩納村と並ぶ県内有数のモズク産地で、県内生産の約二割を占めています。

沖縄県にモズク養殖が普及するのは一九八〇年頃のことですが、津堅島はいち早くモズク養殖を導入しました。モズク養殖は約一〇〇人いる正組合員のほとんどが営んでいて、生産額は三億円前後です。

二〇一四年一月に津堅島を訪ねた時は、ちょうどモズクの採苗時期でした。漁港用

現在の津堅島を支えているのはモズク養殖

地のいたるところにコンパネとビニールシートで組み立てた採苗用の水槽が置かれていました。夏に海底にビニールシートを張ってオキナワモズクを天然採苗し、この種苗シートを細かく切ってコンパネ水槽に投入し、海苔網にモズクの胞子を採取します。種付けした海苔網を五〜一〇枚重ねて沖出しし、順次島の周りに一枚ずつ展開します。そして三〜四月にかけて収穫し、塩蔵品で出荷しています。

#### ④ 海苔

海苔養殖の最北端の産地は松島湾の桂島(宮城県)です。桂島は五年前の東日本大震災によって大打撃を受けましたが、水産庁の「がんばる養殖」の事業を活用して、共同操業を進め順調に回復しています。震災前は一三経営体が海苔養殖を営んでいましたが、震災後三経営体が廃業し、八経営体が二棟の乾燥機を共同利用して生産を再開しました。震災前は二・五億円ほどの生産額でしたが、震災後は施設規模が縮小したこともあり、一・五億円前後で推移しています。

海苔は栄養塩類の多い内湾域が産地で、もともと瀬戸内海の多くの島で栽培されてきました。私が訪れた島の中でも、坊勢島(兵庫県)、走島(広島県)、高島、白石島(岡山県)、男木島(香川県)、弓削島(愛媛県)などたくさんあります。ただし、最盛期に較べると、経営体数、生産量とも激減しています。産地の淘汰が進み、特定の産地(有明海など)に一極集中する傾向にあります。瀬戸内海における海苔養殖の不振は、近年の水温上昇、ダム建設による淡水流入量の減少、N、Pの総量規制強化による栄

海苔養殖の最北端の産地は松島湾の桂島(宮城県)

養塩類濃度の低下（瀬戸内海の栄養塩の供給源は外洋から進入する栄養塩リッチの深層水の割合が大きいといわれていますので、この点も考慮する必要があります）が指摘されています。

例えば瀬戸内海のほぼ中央部に位置する高島（岡山県）の例をみておきましょう。高島にはかつて七経営体が海苔養殖を営んでいましたが、現在は二経営体だけになっています。高島周辺の海域は水深が浅いので、冬季の水温がよく冷え、海苔の生育には好適な条件を備えていました。しかし、近年の水温上昇と栄養塩不足から海苔の収穫期が大幅に縮小しているのです。以前であれば一月初旬から収穫が始まりましたが、現在は一月下旬にずれ込み、一方栄養塩不足から海苔の色落ち時期が早まることになり正月には収穫を切り上げざるを得なくなっています。つまり以前は一〜三月までの五カ月間だった収穫期間がへたをすると一二月中の一カ月間ほどになっているのです。

また白石島（岡山県）では、最盛期に海苔養殖と小型底曳網の兼業経営体が二〇以上ありましたが、次第に姿を消し、二〇〇二年に乾燥施設の協業化が始まった時点では四経営体に減り、二〇一三年に訪れた時には二経営体までになっていました。補助金を得て協業の乾燥施設を導入したため「やめるにやめられない」状態になっていました。

##### ⑤ アワビ

アワビ養殖は一九八〇年代に技研工商と当時のニチロが提携して全国展開をめざし、新しい技術開発として注目されました。この生産システムは、アワビの種苗生産、中間育成、成貝出荷を企業毎に分散してリスクをヘッジし、漁業権の制約を受けない陸上養殖をめざしたものでした。しかし、種苗生産部門を担ったコスモ石油の松山事業所以外は跡かたもなく霧散してしまいました。ちなみにコスモ石油は二〇一四年度で事業から撤退していますので、完全になくなりました。

この一連の動きと深くかかわっていたのが忽那諸島の一つである怒和島（愛媛県）です。中島三和漁協の大野組合長がアワビ養殖を始めたのは今から四半世紀前の一九九〇年のことでした。コスモ石油からエゾアワビの稚貝を購入して、海面に浮かした籠で養殖しています。隣の津和地島の組合員を含む六経営体が任意のアワビ養殖組合を組織しています。一般に養殖アワビは「一口アワビ」と称し、小型サイズで早期出荷しますが、怒和島では肉厚の大型サイズで出荷しています。二〇〇gに育てるのに三年を要するといえます。現在のアワビ養殖組合の年間出荷量は約一〇トン。一億円産業化をめざしていましたが、単価の低迷でそれは実現していません。ちなみにこのアワビは松山市が「坊っちゃんアワビ」の名称でブランド化しています。

##### ⑥ クルマエビ

後で述べる姫島（大分県）や生名島（愛媛県）は塩田跡地を転換してクルマエビ養殖を始めたのですが、後発の琉球諸島の島々では島おこしの切り札として築堤式の養

殖場を造成してクルマエビの養殖が行われています。何れも国の補助金によって整備されたものです。ただ、一時期ウイルスによる疾病の発生で大打撃を受けました。

久米島（沖縄県）にはウイルスフリーのクルマエビの親を生産する沖縄県海洋深層水研究所があります。また、私が訪ねた島の中では、石垣島、与那国島（以上沖縄県）、喜界島（鹿児島県）などでクルマエビを養殖していました。

#### ⑦ 魚類養殖

クロマグロ資源の枯渇から、近年クロマグロ養殖が盛んになってきましたが、その中心地は奄美大島から福江島にかけての海域です。この一帯は水温条件面からクロマグロの養殖に適しています。

水研センターのクロマグロ種苗生産研究施設は加計呂麻島（鹿児島県）にあり、水研センターのクロマグロ種苗生産研究施設は加計呂麻島（鹿児島県）と長崎県がわが国のクロマグロの養殖生産量は約一万トンですが、このうち鹿児島県と長崎県がそれぞれ〇・三万トンでトップ争いをしていて、両県で約六割のシェアを有しています（二〇一三年・水産庁調べ）。両県のクロマグロ生産のほとんどを担っているのが奄美大島（鹿児島県）と福江島（長崎県）で、主として企業型の養殖が行われています。この他に、伊万里湾の青島（長崎県）、福江島の属島の島山島（長崎県）などの島々でも個人経営でクロマグロ養殖に取り組んでいます。

坊勢島（兵庫県）はいち早くハマチ養殖を導入し、一漁業地区としては日本一の生産量を誇ったこともありましたが、一九七二年に播磨灘に発生した大規模赤潮によつ

て甚大な被害を受けたことから経営体は減少、今ではハマチ養殖は行われていません。しかし、最近まき網で採捕したマサバを活魚で持ち帰り、島の周辺で養殖しています。今では「坊勢サバ」のブランドで知られるようになっていますが、これはもともと島に養殖の技術があったおかげです。

## 四・鉱業

### (1) 石炭

二〇一五年七月、長崎県にある端島（通称軍艦島）と高島の炭鉱が、「明治日本の産業革命遺産、製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として国際記念物遺跡会議の世界遺産に登録されました。長崎県には現在五八の有人離島がありますが、このうち松島、池島（以上西海市）、飛島（松浦市）なども石炭の採掘で栄えた島でした。池島は二〇〇一年まで採掘が行われていました。

私が訪れたことのある炭鉱の島は松島と飛島です。

松島は江戸時代に石炭の採掘が始まり、一九六三年に閉山になりました。一時期は六・三九平方キロメートルの島に二万人以上の人が住んでいました。閉山後、一九八一年に電源開発の松島火力発電所が操業を開始し、発電業が島の産業になって

水研センターのクロマグロ種苗生産研究施設は加計呂麻島（鹿児島県）にある

二〇一五年七月、長崎県にある端島と高島の炭鉱が、「明治日本の産業革命遺産、製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として国際記念物遺跡会議の世界遺産に登録

います。大学卒業後海洋調査会社に就職して四〇五年の頃、松島火発の今という環境アセスメントの仕事にたずさわりました。その後、発電所から放流される温排水を活用した魚類養殖業の可能性について検討するため、現地を訪れています。

もう一つの飛鳥は伊万里湾に浮かぶ〇・五平方キロメートルの小さな島です。この島から伊万里湾の海底に向けて石炭が掘られていました。飛鳥で石炭の採掘が始まったのは一七九四年のことで一九六九年に閉山になるまで一七五年間にわたって石炭が採掘されました。多い時には三千人を超える人が住み、長崎市の端島に次ぐ人口密度でした。島には病院、食堂、魚屋、洋服屋、パチンコ店、飲み屋などがあつたといえます。

閉山から半世紀近くたつ現在でも当時の炭鉱住宅の一部や石炭の積み出しに用いた施設が残っています。また、大きなボタ山は島の目印になっています。二〇一三年十二月時点で二七戸、五五人が住んでいますが、漁業とイリコ製造が島の産業です。島には四つの船曳網の経営体があり、伊万里湾内でカタクチイワシを獲り、自ら煮干に加工しています。飛鳥では一九二二年から一九七〇年までの半世紀にわたって巾着網を共同経営した時代もありました。当時四〇数戸の世帯がありましたが、各戸が株を保有し、島民は全員この巾着網で働いたそうです。したがって、炭鉱と在来島民との関係は薄く、漁業収入が相対的に多かった在来島民は「たんこびとが」と炭鉱夫を軽蔑していたそうです。

## (2) 採石業

コンクリートがなかった時代、石は重要な土木・建築材でした。切り出した石は重いので、道路や陸上輸送手段が十分でなかった時代は専ら船で輸送されていました。良質な石材が採れる島は、運搬の手軽さから採石業が発達したのです。表土を取り除いて石を出す道をつくり、船積み用の波止場を造成、発破によって岩を崩して採取するという手順で切りだされました。人力に依存していた戦前までは山の中腹の運び出しやすいところが選ばれ、位置エネルギーを利用して波止場まで運び出しました。

ただ石は有限な資源ですから切りだせばやがて島が無くなってしまいます。地形も大きく改変し、環境破壊にもなることから最近ではほとんどの島で採石を止めています。現在でも採石業が盛んなのが家島群島の男鹿島と西島（以上兵庫県）です。

男鹿島は、家島の宮区と真浦区の共有地で私有地はありません。島には民宿や漁業を営む世帯が住んでいます。全島が採石場になっていて、島の面積の三分の二が削り取られて岩肌が露出しています。家島は採石に伴う収入を得るとともに、その石材を運搬する海運業で島の経済が支えられていたのです。戦後まもない頃は六五の丁場（採石場）があり、当時は機械化が進んでいませんでしたので五〇〇人ほどの作業員が働いていました。その家族を含めると約一〇〇〇人が島で生活していたのです。ところが石材需要を支えた公共工事は阪神淡路大震災後の復興需要が最後となり、現在の丁場は七カ所に減っています。

現在でも採石業が盛んなのが家島群島の男鹿島と西島



男鹿島（兵庫県）の採石現場



北木島（岡山県）の採石現場

一方、坊勢島に近接する西島は家島の宮、真浦両区と坊勢の共有地です。坊勢島は漁業の盛んな島で、漁業にとって島の緑（魚つき林）が大切なことから採石を許可しませんでした。したがって西島の南側（坊勢の共有地）は森林が残り、家島の共有地は採石が進められ、岩肌が露出しています。島には一〇戸ほどが生活していますが、何れも採石業に従事する世帯です。

日銀本店、三越本店や靖国神社の大鳥居と大燈籠などに使われている石はみな北木石です。この北木石の産地は、笠岡諸島にある北木島（岡山県）とその周辺の白石島や高島でした。北木島で石材が採石されるようになるのは明治になってからで、一八九五年に石丁場組合が組織され、北木石が全国に販売されるようになりました。戦前は八〇余の丁場があり、戦後のピーク時の一九五七年には二二〇以上に増えました。島のほとんどの男たちは丁場で働きました。また、石材の加工業も一九六〇年頃から始まり、一九八〇年ごろには六〇もの工場ができました。現在、北木島に残る丁場は二ヶ所だけですが、島のいたるところで丁場跡を見ることができます。一方、石材加工業の方は原料の石材を外国から輸入して加工産地として生き延びてきました。今でも二〇軒ほどが石材加工業を営んでいます。

私が訪ねた島の中で石材業が盛んだった島は、この他に伊万里湾の黒島（長崎県）や琵琶湖に浮かぶ唯一の有人離島、沖島（滋賀県）などがあります。沖島の石は琵琶湖疏水の石垣や東海道線の基礎に使われるなど日本の近代化の礎となる石材を供給し

ました。

## 五．建設業

二〇一〇年国勢調査時点での建設業に従事する人の割合は、全国平均が七・八%だったのに対し、離島は九・七%

二〇一〇年国勢調査時点での建設業に従事する人の割合は、全国平均が七・八%だったのに対し、離島は九・七%を占めています。公共事業のピーク時の一九九〇年代後半は島の建設工事が増加し、漁業から土木作業員に変わった島も多かったのですが、その後の公共事業の縮小で再び漁業・養殖業に戻る人も増えています。しかし、建設業は依然として島の経済にとって相対的に重要な位置を占めています。離島は漁港・港湾、道路、土地改良、災害復旧などの建設需要が多いという事情もありますが、製造業が少なく経済基盤が弱いため、公共事業によって下支えする観点も強いようです。先に示したように離島の面積規模別に産業分類別の就業者割合(表2)を見ますと、二〇平方キロメートル未満の島では漁業者の割合が高いのに対し、二〇平方キロメートル以上の島になると建設業に就業する人の割合が漁業者の倍以上に増えます。つまり比較的大きな島では漁業よりも建設業の方が重要な産業になっているわけです。小さな島には建設業者はいませんが、少し大きな島になると複数の土建業者がいるところが多くなります。ただ小さな島でも、長期にわたって港湾建設などが行われている島では複数の建設業者がいます。例えば、港湾整備が長期にわたって続く青ヶ島

(東京都)では、人口一七〇人にもかわらず二つの建設業者がいました。また、作業員も確保できないため、島外から土木作業員が出稼ぎにきています。最近では震災復興に労働力を取られてしまったためか、私が泊まった宿にはいわゆる「ドボジョ」といわれる若い女性が下宿して、建設現場で働いていました。

## 六．製造業

### (1) 水産加工業

水や冷蔵庫が不自由なく使えるようになるのは、本格的な火力発電所が立地され、あるいは本土側から海底送電されるようになる一九七〇年代以降

島に電気が導入された当初は自家発電が中心でしたから、夜の電燈需要をまかなうレベルのもので、冷蔵庫や製氷に使えるほどの出力はありませんでした。したがって、水や冷蔵庫が不自由なく使えるようになるのは、本格的な火力発電所が立地され、あるいは本土側から海底送電されるようになる一九七〇年代以降のことです。外洋離島の小さな島、例えばトカラ列島のように産業に回せるほどの電力が賄えない島もいまだにあります。

このように多くの島は十分な電力が得られませんでしたので、島に水揚げされる水産物はすぐに加工するか、活かしておく以外に方法はなかったのです。島の水産加工業はこうして地場産業として形成されました。したがってあくまでも島周辺で獲れる

資源の加工であり、原料を外から調達して大規模に加工するような産業には発展しませんでした。

かつてはスルメや鰹節、乾鮑などが作られた時代もありましたが、現在は冷蔵、冷凍や活貝で流通するようになりましたので、これらの加工品は島では作られておりません。島の水産加工は獲つたらすぐに処理しなければならないようなものに限られません。

代表的な加工品は、シラス・コウナゴのしらす干し、カタクチイワシのイリコ、海藻類の乾燥品など

代表的な加工品は、シラス・コウナゴのしらす干し、カタクチイワシのイリコ、海藻類の乾燥品などです。シラス・コウナゴは仔稚魚ですので、漁獲後すぐに熱を加えて迅速に加工する必要があります。例えば三河湾と伊勢湾の中間に位置する篠島(愛知県)は船曳網漁業が盛んですが、この島にはシラス干しの自動乾燥施設が整備され、その日のうちに製品化しています。同じように瀬戸内海の走島(広島県)でも船曳網で獲れたシラス・コウナゴをチリメンに加工しています。

イリコはカタクチイワシの幼魚を原料としますので、やはり迅速な加工処理が求められることとなります。周防大島の属島・浮島(山口県)の例を紹介しましょう。浮島には五ヶ統のイワシ網があります。二艘船曳網で、曳網二隻、運搬船一隻、探索船一隻の合計四隻で船団を構成しています。五船団のうち四船団は島民出資の共同経営、一船団は個人経営です。この五船団には六人が乗り組むので合計三〇人が働いており、島の重要な雇用機会となっています。イワシの漁期は六月後半から一二月中旬までの

半年間。操業は早朝から始まり、一〇時には終漁し、すぐに加工作業に入ります。船団毎にイリコ工場が整備され、獲ったイワシは運搬船によりピストン輸送され、加工場に運ばれてただちにボイル、温風乾燥されてイリコになります。この加工作業は島の女性たちが担っています。各工場には七〜八人が働いています。

もう一つ、伊万里湾の飛島(長崎県)の事例を紹介します。一艘船曳網で漁獲したカタクチイワシは船槽に入れて持ち帰り、漁船が港に係船するとただちにフィッシュポンプで工場のFRP水槽に送り込まれます。イワシはボウルですくってセイロに並べられ、これを二〇段ほど重ね、煮熟用の煮釜にセイロを入れて五分ほどボイルします。セイロを引き上げる時に釜の表面のアクをさーっと取り除き、うどんの差し水よろしく水をかけます。ボイルしたイワシは乾燥台車に並べ、一台の台車に三二枚のセイロを重ね、直ちに温風乾燥機のある部屋に運び込まれて、丸一日かけて製品に仕上げます。漁業は二〜三人で操業し、数時間の操業で島に戻って加工するため、鮮度は抜群できわめて良質のイリコとして評判になっています。

ヒジキは生のまま島外に出荷するわけにはいきません。鮮度は落ちますし、下手すると腐ります。また、かさはってどうしようもありません。したがって島で天日干しにするか、煮熟してから乾燥するかどちらかの方法で出荷されます。後者の方が手間はかかりますが高付加価値化を実現できます。興居島(愛媛県)の例を紹介しておきましょう。干潮時に刈り取ったヒジキは洗って、二〇〇kgづつ釜に入れて約八時間

伊万里湾の飛島(長崎県)の事例

酒づくりは島の重要な製造業の一つ

## (2) 醸造業

島は比較的閉鎖的な環境にありましたが、このことが結果的に特徴的な伝統食品を生み出すことにもなりました。新島（東京都）を元祖とし、伊豆諸島でつくられているクサヤはその代表例です。クサヤは塩干品ですが、塩水ではなく「くさや液」につけて干したものです。海に囲まれていて塩が貴重だったとはにわかに信じられませんが、塩をつくるためには燃料が必要でしかも時間がかかります。塩干品をつくるにあたって塩が貴重であったことから、塩汁を使いまわした結果、乳酸菌の一種であるクサヤ菌が発生、これによってあの独特の、しかしやみつきになるクサヤが誕生したのでした。

酒づくりは島の重要な製造業の一つです。島で米は貴重でしたので、日本酒がつくられているのは、佐渡島（新潟県）や島後島（島根県）などの大きな島に限られます。島ではむしろ国産米以外の、麦、サツマイモ、黒糖、輸入米を原料とした蒸留酒づく



イリコ加工の現場（長崎県・飛島）



煮熟したヒジキの乾燥作業（愛媛県・興居島）

りが盛んです。

代表的な麦焼酎の産地は**吉岐島**（長崎県）で、七つのメーカーがあります。また、鹿児島県の離島では、サツマイモを原料とした芋焼酎が**下甑島**、**種子島**、**屋久島**などの比較的大きな島でつくられています。

奄美群島では、黒糖を原料とした黒糖酒が各島でつくられています。

奄美群島では、黒糖を原料とした黒糖酒が**喜界島**、**奄美大島**、**徳之島**、**沖永良部島**、**与論島**の各島でつくられており、たくさんのメーカーがあります。沖永良部島に行つて始めてわかつたのですが、じつは黒糖酒というのはもともと泡盛が原型だったので。戦後、奄美諸島は米軍の軍政下に置かれましたが、食糧の配給もままならない中で酒に回す米が不足したため、島に豊富にあったサトウキビを原料にしたのです。その後日本に復帰しますが日本の酒税法では黒糖を原料とする焼酎造りは認められていませんでした。しかし、黒糖を原料とした焼酎の飲酒習慣と歴史的背景を考慮して、一次もろみに米麴を使用するという条件で奄美諸島に限定して許可され、「黒糖酒」「黒糖焼酎」と呼ばれるようになりました。

沖縄県はいわずと知れた泡盛です。泡盛は小さな島を含めてほとんどの離島でつくられています。もともと家でつくられていた名残です。日本の最南端の島、**波照間島**（沖縄県）には「泡波」というブランドの泡盛があり、希少価値からとんでもないプレミアムが付いています。島には集落が経営する共同売店が四つありますが、それぞれの売店で一〇〇ccの小瓶が一八〇円で売られていました。この泡盛を島旅から帰つてイ

ンターネットで調べてみると、九八〇円という値段がついて得をした気になったこともあります。日本の最西端の**与那国島**（沖縄県）には酒税法上スピリッツ（アルコール度が四五度以上）に分類される花酒があります。花酒のアルコール度数は六〇度で、この酒の話が司馬遼太郎の「街道をゆく」に出てきます。人口一五〇〇人ほどの島にこの花酒の醸造所が三社もありました。島内消費より島外に出荷している量が圧倒的に多く、「外貨」獲得に貢献しているのです。

外貨を稼ぐといえ、**青ヶ島**（東京都）の焼酎は特筆すべき存在です。人口が一七〇人しかいない島なのに二〇人の杜氏がいて、年間八千万円を出荷し、建設業に次ぐ島の代表的産業になっています。この青ヶ島の焼酎づくりは隣の八丈島から伝わったもので、昔は各家庭で密造酒としてつくられていたものでした。

**八丈島**（東京都）をはじめ伊豆諸島はやはり麦やサツマイモを原料とした焼酎がつくられています。そのルーツは薩摩藩にあります。焼酎の製造技術を八丈島に伝えたのは薩摩藩の流人・丹宗庄右衛門でした。一八五三年に密貿易の罪で八丈島に流されてきました。その当時の八丈島は飢饉が頻繁に起こり、食料難がつづいていたため米から酒をつくと庶民の食糧不足がさらに深刻になることから、島では神事や祝儀の場合を除いて酒造を禁止していたのです。しかし芋を原料にすれば穀物を使わなくていい。彼は郷里の薩摩から焼酎の製造器具を取り寄せ、芋焼酎の製造技術を伝えました。これが八丈島における芋焼酎の始まりであり、やがて伊豆諸島の島々に伝播し

外貨を稼ぐといえ、**青ヶ島**（東京都）の焼酎は特筆すべき存在

たのです。

### (3) 製糖業

サトウキビは原料のまま出荷されることはありません。あんなかさばるものを運搬するのはコストがかかり、効率が悪いからです。したがって、サトウキビをつくる島にはかならず製糖工場があります。サトウキビの収穫期は冬ですので、この時期だけ製糖工場が稼働し、島はにぎやかになります。

砂糖の原料は、北海道でとれるビーツとサトウキビですが、サトウキビから作られる砂糖は「甘しょ糖」と呼ばれ、「分蜜糖」と「含蜜糖」の二種類に分けられます。「含蜜糖」は糖蜜を分離せずにそのまま結晶化したもので、いわゆる「黒糖」といわれるものです。不純物が多く、ミネラル分が多いのが特徴です。一方、「分蜜糖」は「糖蜜」を分離して結晶にしたもので、白糖やグラニュー糖など「精製糖」の原料になります。島では「原料糖（粗糖）」をつくり、最終的な製品化は本土の工場で行われています。生産量は「分蜜糖」が圧倒的に多く、「含蜜糖」の生産量は全体の七%ほどにすぎません。

サトウキビの生産量が多い島では「分蜜糖」が、少ない島では「含蜜糖」がつくられています。「分蜜糖」の工場は、鹿児島県は奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の各島、沖縄県は伊是名島、久米島、北大東島、南大東島、宮古島、伊良

サトウキビの生産量が多い島では「分蜜糖」が、少ない島では「含蜜糖」がつくられている

部島、石垣島の各島にあります。「含蜜糖」は、鹿児島県の場合は個人経営の小規模な工場で昔ながらの方法でつくられていて四二工場あり、沖縄県の場合は粟国島、西表島、小浜島、伊平屋島、伊江島、多良間島、波照間島、与那国島の八つの島でつくられています。

製糖工場が稼働している時期に島を訪ねた時は、できるだけ工場見学をするようにしています。徳之島の南西糖業は大規模な「分蜜糖」の工場の例です。この対極にあつたのが同じ島で昔ながらの製法で「含蜜糖」をつくっている徳南製糖でした。また、粟国島では近代化された「含蜜糖」の工場を見学しました。

南西糖業の伊仙工場では八〇人以上の従業員が三交代勤務で二四時間操業しています。サトウキビはトラックスケールで計量、同時にサンプルをとって糖度を測定、原料集積場に搬入して選別、プレカット、第一カッター、第二カッターを経て裁断され、シュレッダーで粉碎後、圧搾機でサトウキビのジュースを得ます。このジュースに熱を加えて煮詰め、砂糖の結晶を大きくした後、遠心分離して原料糖（結晶）と糖蜜に分けます。

一方の徳南製糖の工場は、サトウキビをロール状の圧搾機で絞り、しぼり汁を釜に入れて煮詰めます。釜は焼き物を焼く登り窯のような形をしていて、木を燃料にしています。釜は四段階に分かれており、アクを取りながらかき混ぜ、次の釜へと移しながら煮詰めます。しぼり汁が飴状に変化したら螺旋状のスクリーンで冷やしながら送

南西糖業の伊仙工場では八〇人以上の従業員が三交代勤務で二四時間操業

栗国島の製糖工場はJAおきな  
わが経営する、二〇一一年三月  
に竣工した最新鋭の工場

り、箱に詰めて出来上がりです。この工場では七、八人が働いていました。ちなみに和歌山熊野の那智の滝に行くと「那智の黒飴」が売られていますが、この原料はすべてこの徳南製糖の黒糖です。

栗国島の製糖工場は二〇一二年三月に竣工した最新鋭の工場でした。JAおきなわが経営しています。原料のサトウキビはカット、細裂して三重電動圧搾機にかけて、ジュースを得ます。このジュースに石灰乳(CaCO<sub>2</sub>)を添加して加熱、不純物を取り除き、得られた清浄汁を煮詰めてさらに水分を蒸発させ黒糖を得る、という工程です。工場の稼働は一月から三月までの二ヶ月間しかないので、工場で働く三三人はそのほとんどが島外から来た季節労働者でした。毎年同じ人が来るようで、ミカンの収穫にたずさわった後、製糖工場に移るなど、全国を渡り歩いている人が多いとのことでした。

近年「黒糖」の人気が高まってきたことから、ニセ物が多く出回るようになりました。そこで消費者庁は、「黒糖」を、「さとうきびの絞り汁を中和、沈殿等による不純物の除去を行い、煮沸による濃縮を行った後、糖みつ分の分離等の加工を行わずに、冷却して製造した砂糖で、固形又は粉末状のものをいう」と定義し、混ぜ物は「黒糖」と呼んではいけないことになったのです。混ぜ物には加工黒糖、黒砂糖、黒みつなどの名称がつけられていますので、ご注意ください。こうした定義の強化は、離島の重要な産業であるサトウキビ農業を不当な競争から守る狙いが込められているのです。



近代的な分蜜糖の製糖工場（鹿児島県・徳之島）



伝統的な含蜜糖の製糖工場（鹿児島県・徳之島）

#### (4) 製塩業

島は塩づくりにより便利だったので、昔から製塩業が盛んで、

日本は岩塩を産しませんでしたので、塩の原料は昔から海水でした。海水を煮詰めて塩とがりを採りました。したがって塩の産地は海に面した所でした。島は塩づくりに便利だったので、昔から製塩業が盛んでした。

例えば、上島諸島の弓削島(愛媛県)は平安時代末期に後白河法皇の荘園として塩を献上していました。鎌倉時代になると京都の東寺の領地となり、やはり塩を献上していたのです。この弓削島の属島であり、現在は無人島になっている豊島(愛媛県)では、さらに古い古墳時代の塩づくりの遺跡が発見されています。弓削島と橋をつながる佐島(愛媛県)でも最近になって塩づくりの遺跡が見つかりました。

直接海水を煮詰めるのはエネルギーコストがかかり、不経済です。そこで昔の人は煮詰める前に自然エネルギー(太陽熱、風力)を利用して、あらかじめ海水を濃縮することを発見しました。製塩技術は揚げ浜式、入り浜式、枝条架式と進化してきました。それ以前は海藻に海水をつけて製塩する藻塩が知られていますが、揚げ浜式が導入された古墳時代末期からは砂を利用して濃縮海水を得る技術に変わりました。揚げ浜式は砂を敷いた塩田に海水を桶で汲みあげて濃縮する方法です。現在でも能登半島の先端にある珠洲市にこの方式の塩田が残っています。揚げ浜式は人力で海水を

汲み上げていたので大変な労力を必要としました。続いて登場したのが入り浜式です。この方式は満潮時に海水を塩田に引き入れて、太陽熱で水分を蒸発させて濃縮海水を得る方法です。瀬戸内海は浅瀬が多く、干満差が大きく、かつ日射量も多かったためこの方式の塩田が島を中心に広がりました。一九五五年ごろになると、海水を汲み上げて流下盤を通じて濃縮した海水をさらにポンプで汲み上げて竹の枝で組んだ枝条架の上から流下させ、風を併用して濃縮する方法へと進歩します。ちなみに私が最初に就職した会社の創業者がこの海水取水工事のバイオニアでした。

しかし、イオン交換膜法の開発によって塩づくりは革命的な変化を遂げます。海水を物理的に濃縮する方法から化学的に生産する方法に変わったのです。そして、一九七一年の「塩業近代化臨時措置法」によって、全国の塩田が最終的に姿を消しました。ところが、このイオン交換膜法によってつくられる食塩は塩化ナトリウムの濃度が九九・九%以上にも達し、他のミネラル分がきわめて少ないことから、味や健康面からミネラル分に富む塩が求められるようになります。そこに登場したのが、輸入岩塩を溶かして再結晶させた食塩でした。市場に流通する料理用の塩はほとんどがこの手のものです。

塩田は島の経済を支える産業でした。例えば佐木島(広島県)には、佐木、向田、須ノ上の三つの集落がありますが、「塩業近代化臨時措置法」によって一九七一年に廃止されるまで各集落に塩田があり、その合計面積は五〇ヘクタールに達していま

一九七一年の「塩業近代化臨時措置法」によって、全国の塩田が最終的に姿を消した

用 廃止塩田をクルマエビ養殖に活

た。塩田は一・五〜二ヘクタールごとに区画され、この一区画を一塩戸と称し、一塩戸あたり一〇人ほどが働いていました。塩田で働く人は、島全体で三〇〇人ほどになり、島の重要な雇用の場だったのです。したがって、製塩業の廃止は島の経済に大きな打撃を与えることになりました。

廃止塩田をどう活用するか。多くの島では試行錯誤が続きましたが、塩田をそのまま活用する方法として当時技術開発されたクルマエビ養殖が注目されました。この当時、水産庁の初代研究部長を務めた藤永元作がクルマエビの人工ふ化に成功、藤永が設立した瀬戸内海水産開発は山口県秋穂でクルマエビ養殖を手がけていました。最初に目をつけたのが姫島（大分県）でした。藤永に協力を求め、多少の紆余曲折を経て一九六五年六月に第三セクターの「姫島車えび養殖株」を設立し、現在に至っています。この姫島の取り組みが注目され、多くの島で廃止塩田にクルマエビ養殖業が導入されました。しかし、技術が未熟であったことや急性ウイルス血症（PAV）の発症などで廃業が相次ぎ、現在クルマエビ養殖が継続しているのは姫島と、生名島（愛媛県）の日輪養魚や大崎上島（広島県）などに限られています。

ところで塩は国による専売品であり、日本専売公社が次のような一部の例外を除いて独占していました。昔からの製法で作っていた能登の揚げ浜塩田の塩はワカメを少し混ぜて「塩」という解釈を変えていましたし、伊豆大島のタワー方式でつくられた塩は会員に配布するという建前で塩を「販売」という概念には含めていなかった



塩田跡地を活用したクルマエビ養殖場（大分県・姫島）



タワー方式の製塩工場（沖縄県・粟国島）

のです。その後、専売公社の民営化を経て、一九九七年四月に塩の専売制度が廃止され、さらに二〇〇二年四月から塩の販売が完全に自由化されました。

海水を煮詰めるだけで塩ができるのと安易に考える素人が多く、塩の販売の自由化を契機に、多くの島で塩づくりが盛んになってきました。しかし海水を前段で濃縮することもせず、いきなり海水を平釜で炊くため、コスト高になって採算がとれず、途中でやめるケースが目立ちます。

そんな中で本格的な塩づくりをしているのが粟国島（沖縄県）です。島の北はずれの海岸付近に（株）沖縄海塩研究所があります。ここは約一〇mのタワーから海水を流下させ、風であらかじめ水分を飛ばし濃縮海水を得てから、平釜で煮詰めて自然塩をつくっています。この創業は一九九四年で、伊豆大島で先行してタワー式塩づくりに取り組んでいた谷さんの同僚の小渡さんが始めたものです。平釜の燃料は島で発生した廃材を利用し、運搬コスト以外はかかっておりません。塩の価格は二五〇gで五八〇円と岩塩を再結晶した食塩に較べるけっこう高くなっていますが、自然食品店を中心に売れています。ちなみに年商は生産量と単価から二億円程度と推定され、島の重要な産業になっています。なお島にはこの研究所の他にもう一社が塩をつくっています。

変わったところでは青ヶ島（東京都）の「ひんぎゃの塩」があります。「ひんぎゃ」とは島で火山の噴気口のことですが、島では今でも水蒸気が噴き出ていますのでこの蒸気熱を利用して海水を直接炊いています。燃料はタダですので、こうした条件を備えていれば製造コストを低く抑えられ、採算に合うことになるのです。

### (5) 造船業

FRP漁船が普及する一九七〇年代以前の漁船は木造船でした。島には船が不可欠でしたので、有力な島にはかならず船大工がいました。また漁具をつくる鍛冶屋もいました。しかしFRP漁船が普及するようになると船大工は失業します。なかにはFRP漁船に商売替えした人もいますが、そのほとんどは転職を余儀なくされました。これまでに回った島では、転職先は漁師や民宿経営などでした。

小佐木島（広島県）の例

○五平方キロメートルの小さな島ですが、明治から大正期にかけて大きな造船場と原料の木材の貯木場があり、一〇〇人以上の人が働いていました。その後糸崎ドックに買収され一九二一年に閉鎖しています。造船場はなくなりましたが、島の人たちは造船技術を身につけていましたので、個人経営の小規模造船場として生き残り、多い時には一〇軒の造船場がありました。そしてFRPの普及で木造船の需要がなくなる一九六三年ごろまで五軒の造船場が残っていました。

瀬戸内海の島々は漁業と海運で栄えたところが多いのですが、木造船の建造から始

まり、近代的な造船業へと発展してきた島もあります。その代表が因島（しまなみ海道）の橋が架かり離島ではなくなりました）を発祥の地とする日立造船でしょう。今でもこの周辺の島にはたくさん造船場があります。因島の対岸の岩城島（愛媛県）には、三つの造船場があります。この三つの造船場で七〇〇人を超える人たちが働いており、島の最も重要な産業になっています。隣の瀬戸田などから通勤している人もいて、周辺地域に貴重な雇用の場を提供しています。

## （6）その他

奄美大島（鹿児島県）の大島紬  
八丈島（東京都）の黄八丈、久  
米島の久米島紬など

島では工芸品に分類される織物が島の女性の手によって伝統的に作られ、地域の貴重な収入源でした。奄美大島（鹿児島県）の大島紬はあまりにも有名ですが、これ他に八丈島（東京都）の黄八丈、沖縄県では久米島の久米島紬、宮古島の宮古上布、石垣島などの八重山上布やミンサー、与那国島の花織やドゥタティなど、島ごとに伝統的な織物があります。しかし生活・文化の変化によって、着物の需要は激減、いまやこれらの産業は大きな岐路に立たされています。

一方、島には迷惑施設も置かれてきました。島は海によって隔離されているので公害の影響を軽減できると考えたのでしょうか。その代表的な島に、瀬戸内海の四阪島（愛媛県／家ノ島、美濃島、明神島、鼠島、梶島で構成）や契島（広島県）、大久野島（広

島県）があります。

別子銅山は、公害を回避するため、一九〇五年に本土から四阪島に製錬施設を移転させました。足尾銅山は公害の原点として知られ、「負の遺産」を残しましたが、同じ時期に開発された別子銅山は製錬所を四阪島に移す英断によって新居浜周辺への影響が避けられました。その後、四阪島の製錬所は閉鎖され、一九八八年以降無人島となつています。

広島県の契島には東邦亜鉛の鉛の製錬所があります。また近くの大久野島では戦時中、毒ガスが製造されていきました。私は若い頃に電源開発の竹原火力発電所や中国電力の火力発電所の立地のための環境調査でこの周辺の調査をしていましたから、契島や大久野島はよく遠くから眺めたものです

## 七．観光業

島は交通不便なところが多いので、島を訪ねたならば泊らざるを得ません。通過型の観光地は少ないことから、どの島にも宿泊施設はありません。さすがに世帯数一〇戸以下の島には宿泊施設があるケースが少ないのですが、二〇戸以上の島ならたいがい民宿はあるでしょう。宿泊施設は豪華なリゾートホテルから、ホテル、旅館、民宿、はては民泊施設まで様々です。また観光客のための飲食施設、土産物店やレンタカー、

足尾銅山は公害の原点として知られ「負の遺産」を残した

レンタサイクルなど観光サービスは島の経済にとって重要な位置を占めています。島の特徴的な観光資源を概観しておきましょう。

## (1) 島料理

冬季の名物料理トラフグ。この他にシロミル、アナゴ、カキ、シヤコ、クルマエビなど

三河湾に浮かぶ日間賀島(愛知県)は日本一人口密度の高い島です。島にはホテル・旅館が一六軒、漁業民宿が六八軒あります。収容人員は三〇〇〇名を超えます。日間賀は何の変哲もない平らな島ですが、島を訪れる人は美味しい魚料理を食べに来るのです。この島は「タコとフグの島」を標榜し、タコは周年、遠州灘で獲れるトラフグは冬季の名物料理になっています。この他にシロミル、アナゴ、カキ、シヤコ、クルマエビ、コウナゴ、シラス、ナマコなどの四季折々の水産物が提供され、本土側の旅館では味わえない新鮮な土地の水産物を提供し、差別化を図っています。年間の観光客は三〇〇四〇万人に及びます。夏は海水浴、秋は海釣り、冬はフグ料理の顧客にぎわいますが、春は観光客が少なかったため、小中学生の体験漁業を導入し、周年型観光が実現しています。漁師は自ら獲つたものを民宿で提供することにより魚介類の高付加価値販売を実現しています。いわば島ぐるみで漁業の六次産業化を進めてきたのです。

日本海に浮かぶ粟島(新潟県)には三四軒の民宿があります。このうち漁協の正組合員が経営する民宿が二六軒ですので、ほとんどの民宿は漁業と兼業しています。粟島に民宿が増えてきたのは一九七一年ごろからです。いわゆる「離島ブーム」のはしりといえます。粟島漁港の整備が進み、一九六八年から船をつかわずに直接船が係船できるようになり、さらに一九七〇年から東北電力の火力発電所が完成、電気が終日使えるようになりました。つまり観光客を受け入れるインフラが整備されたことにより島外からの観光客が急速に増えたのです。観光客のピークは一九九二年で、年間六万人近い人たちが粟島を訪れています。もちろん粟島の観光の目玉は島で獲れる新鮮な魚介類の料理です。二〇一三年に民宿・与平に泊まりましたが、その時の夕食を紹介しておきましょう。鱈とワラサの刺身、モズク酢、メバル煮付、ヤリイカ焼、サザエツボ焼、ヒラメフライと、新鮮な島の幸が並びました。

## (2) 民泊と体験漁業

日間賀島のように体験漁業などで島を訪れる小中高生は増えています。伊万里湾に青島(長崎県)という面積〇・九〇平方キロメートルの小さな島がありますが、ここに年間三〇〇〇人ほどの体験型修学旅行生が訪れています。島に民宿が一軒しかありませんので、島に来た中高生は島の漁師の家に分散して一泊します。受け入れる民泊の家は一八戸に及びます。体験メニューは味覚体験と漁業体験に分かれ、前

観光客を受け入れるインフラが整備されたことにより島外からの観光客が急速に増えた

者は、魚のおろし方実習、押し寿司づくり、巻き寿司づくり、煮しめの田舎料理、カマボコづくり、さつま揚げづくりで、後者は、籠、タコツボ、刺網、定置網、カサゴの延縄釣り、港と船からの釣り、養殖の餌やり体験、地引き網などです。こうした体験学習の受け入れで島の実収入は年間二五〇〇万円ほどになっています。

### (3) 海洋性レクリエーション

親水アメニティタイプ、遊漁タイプ、スポーツタイプの三つに分類できる

海洋性レクリエーションは、①海水浴、磯遊び・浜遊び、散策、海辺でのキャンプなどの親水アメニティタイプ、②船釣り、岸釣り、潮干狩りなどの遊漁タイプ、③プレジャーボート、ダイビング、ボードセーリング、サーフィン、シーカヤックなどのスポーツタイプの三つに分類できます。

このうち島で盛んなのが、遊漁とダイビングです。島は周囲に水産資源が多いので、大勢の遊漁客が訪れます。朝のフェリーで島に渡り、釣りをして夕方帰る日帰りのパターン、民宿に泊まるケース、また遊漁船を利用し、島の周りの岩場に瀬渡しをしてもらって釣るケースなどです。ただ、本土側と違って乗合型の遊漁はあまり見かけません。

玄界灘に浮かぶ松島（佐賀県）は面積〇・六三平方キロメートルの小さな島です。この島は全世帯がクリスチャンです。島の漁業はアワビ、サザエ、ウニ、ナマコを対

象とする海士漁業がメインですが、この他に遊漁案内業が営まれています。遊漁船は四隻あり、呼子で顧客を乗せ、遠くは五島列島方面の島に瀬渡しで運んでいます。この遊漁案内業は確実な収入が見込めるようで、全船後継者がいて、父子で運営されています。

ダイビングは琉球列島や伊豆諸島など暖かい海のほとんどの島で行われています。各島にはダイビングショップやダイバーが泊まれる民宿やペンションが整備されています。また、ダイビングでしばしば島を訪れるうちに島が気に入って定住している人も多く見受けられます。島にIターンして来る人の多くはこのスポーツタイプのレクリエーションがきっかけになっています。

例えば、南北に細長い種子島（鹿児島県）は西か東かどちらかが必ず波が高いのでいつでもサーフィンができる島としてサーファアのメッカになっています。このため、島を訪れるサーファアが多く、なかには島に定住している人がたくさんいます。漁業後継者の調査で種子島を訪問したことがありましたが、親方をのぞき定置網の乗組員全員がIターンサーファアだったのは驚きでした。

### (4) 芸術祭などのイベント

二〇一〇年から香川県の離島を舞台に瀬戸内国際芸術祭が三年に一回開催されてい

ダイビングでしばしば島を訪れるうちに島が気に入って定住している人も多く見受けられる

第一回芸術祭は男木島、女木島、直島、豊島、小豆島、大島（以上香川県）と犬島（岡山県）が舞台

ます。島の人々と世界中からの来訪者との交流を通じて島の活力を取り戻し、島の伝統文化や美しい自然を活かした現代美術を通じて瀬戸内海の魅力を世界に向けて発信しようとの試みです。会場となる各離島に芸術家たちが美術作品をつくり、様々なイベントが会期中に開催されます。この企画の仕掛け人は岡山に本社を置くベネッセコーポレーションの二代目で直島に拠点を置く福武財団理事長の福武總一郎氏です。第一回芸術祭は男木島、女木島、直島、豊島、小豆島、大島（以上香川県）と犬島（岡山県）が舞台になりました。一〇五日の期間中、男木島だけで延べ一〇万人が来ています。第二回は会場となる島が五つ増え、今年第三回が開催されることになっています。

私は少々へそ曲がりなので、人が大勢押し寄せるイベント時期を避け、二〇一五年に男木島と女木島を訪ねました。男木島ではこのイベントを契機にUターンが増え、二〇〇八年に休校になっていた小中学校が再開し、新しい校舎の建設工事が進められていました。また、若い漁師の新規就業が二人もいたのです。これは明らかに福武氏のねらいが的を得ていたことを証明するものでした。

この香川県を中心とする芸術祭に刺激を受けたイベントの開催も広がりつつあります。出羽島<sup>てはしま</sup>（徳島県）では二〇一三年に「出羽島アート展」が開催されました。対岸の牟岐町内に住む大学時代の友人に誘われて、開催期間中、島を訪れました。出羽島は遠洋カツオ釣り、遠洋マグロはえ縄で栄えた島ですが、遠洋漁業の衰退とともに現

在は人口一〇〇人ほどの過疎と高齢の島になっています。この島の家は軒先に上下に開くミセと呼ぶ板戸があるのが特徴です。上の板が庇、下の板が縁台を兼ねています。雨が降らない時はシタミセ（下の戸）をおろして、漁具の手入れや縁台として使いました。このつくりは「ミセ造り」と呼ばれ、この島の特徴的な建築様式です。アート展では、この建築様式の古民家を会場として様々なオブジェや芸術作品が展示されていました。

もう一つの例は三河湾に浮かぶ佐久島（愛知県）で、二〇一一年から、「島を美しくつくる会」が中心になって地域とアートの協働による島おこしのプロジェクトが始まり、芸術系の大学生などが制作したオブジェが島の一九カ所に設置されていました。

## (5) エコツーリズム

近年、自然環境の保全に考慮した新しい形の観光、エコツーリズムが脚光を浴びている

近年、自然環境の保全に考慮した新しい形の観光、エコツーリズムが脚光を浴びています。島でもこうした取り組みがみられるようになってきました。その代表例が御

蔵島（東京都）です。

御蔵島はオオミズナギドリ（カツオの群れにつくことからカツオドリとも呼ばれる）の日本有数の繁殖地です。もともとこの島は伊豆諸島の全域に生息していましたが、御蔵島以外は激減あるいは絶滅してしまいました。カツオドリは三月に御蔵島にやっ

海食崖に囲まれた御蔵島は、カツオドリのヒナが貴重なタンパク源だった

てきてスダジイなどの木の根元に巣穴を掘って繁殖の準備をし、六月に雌雄のつがい  
が一個の卵を産みます。八月に孵化したヒナは急速に大きくなって八〇〇gほどにな  
り、その後体重を減らして、十一月頃南にむけて旅立ちます。

海食崖に囲まれた御蔵島は先に示したように「海に背を向けた島」の典型でした。  
港がない御蔵島には漁船がなく、島の周りの水産資源を利用できなかったため、島民  
の貴重なタンパク源はこのカツオドリのヒナだったので（卵、亜成鳥、成鳥は一切  
禁猟）。島民は巣穴をほってヒナを獲り、これを余すことなく利用しました。ただし、  
厳格な利用規則を定めて持続的な利用を図ってきました。鳥の利用についても水産資  
源と同じような資源保護のローカル・ルールが定められていたことは驚きでした。こ  
うした利用制限によって御蔵島には今でもカツオドリが繁殖しているのです。

カツオドリは海の魚を食べ、糞を森林に供給しましたので、栄養たっぷりの森林の  
木は巨樹に成長しました。環境省が二〇〇〇年に行った調査では御蔵島の巨樹（地上  
一・二mのところの樹まわりが三メートル以上）は六九三本で、市町村別では全国第  
二位です。この巨樹の森は腐葉土を育み、森林を浸透した雨水は海に流れ込み、島の  
まわりは生産力の高い海を形成しています。そこにミナミハンドウイルカが生息して  
います。生息数は約一二〇頭で、個体識別され、保護されています。つまりカツオド  
リは海から栄養塩類を陸に運び、森を育て、森からの有機物は島の生産力を高めてイ  
ルカの海をつくっていたのです。まさに物質循環の絶好の教科書がこの御蔵島にはあ



スダジイの根元に掘られたカツオドリの巣穴（東京都・御蔵島）



イルカと遊ぶシュノーケリングの人たち（東京都・御蔵島）

エコツーリズムは、巨樹のツアーとイルカウォッチング

ります。

エコツーリズムは、この巨樹のツアーとイルカウォッチングです。山に入るにはガイドが必要です。ガイド料は半日四〇〇〇円、ただし一人の場合は六〇〇〇円になります。いくつかのコースが設定されていてガイド一人の利用者は七人を上限とし、一コース当たり利用者是一日五〇人までに制限されています。一方、イルカウォッチングは船外機に乗り込みシユノーケリングでイルカと一緒に泳ぎます。料金は二時間七五〇〇円、午前と午後潜ると一五〇〇〇円になります。イルカウォッチングの案内業者は一人です。ただし一日の船数は三〇隻（午前と午後）と決められ、利用客を総量規制し、イルカにストレスを与えるのを防いでいます。島内には一〇軒ほどの民宿があり、年間一万人の観光客が訪れることから、エコツアーの観光収入は数億円を下らないものと推定されます。

御蔵島は、観光客による島の資源利用を制限し、抑制した利用のもとで自然との共生を図りながら、決して欲深くなく、島の資源の範囲で自分たちのささやかな生活を満喫している「足るを知る島」といえます。

## (6) 温泉と登山

日本の島は火山島も多いので、温泉や高い山もまた多く存在します。ご存知の通り、

九州一高い山は屋久島（鹿児島県）の宮之浦岳（一九三六m）ですし、北海道の利尻島には利尻山（二七二一m）があります。この二つの山は日本の百名山として知られています。

火山島が連なる東京都の伊豆諸島には標高五〇〇〇〜八〇〇mのトレッキングに適した島が多く、山登りに訪れる観光客もたくさんいます。私の島旅でもこれまでに、御蔵島（御蔵島）、宮塚山（利島）、天上山（神津島）に登っていますが、このうちの天上山を紹介しましょう。天上山は標高五七一mで、港から頂上までの所要時間は約一時間。頂上は台地になっていて、いわゆる火口原が広がっています。うす暗い林道を抜けると岩だらけの荒涼とした風景に一変します。新東京百景の地からは大島、利島、新島、式根島が、方向を転ずると三宅島、御蔵島を展望できます。

火山島にはたいい温泉があります。私は温泉好きなので、温泉のある島では必ず入浴することになっています。島には「秘湯」と呼ぶにふさわしい湯があります。そのうちの二つを紹介しましょう。

**硫黄島（鹿児島県）**は今でも島のあちこちから水蒸気が噴き出す活火山です。港の海水は火山から噴出する鉄分の影響で赤褐色を呈していて、こんな光景は硫黄島以外にはみられません。島には天然に湧きだすお湯を貯める露天風呂が三つほどありますが、潮の満ち引きに関係なく入れるのが東温泉です。岩肌から四五℃以上の温泉水が流出し、その最上段にコンクリートで固めた浴槽があり、中段、下段と進むごとに温

東京都の伊豆諸島には標高五〇〇〜八〇〇mのトレッキングに適した島が多い



神津島（東京都）の天上山の火口原



硫黄島（鹿児島県）の東温泉の露天風呂

度が下がります。上段は熱くて入るのは大変ですが、下段は四〇℃以下なのでのんびりと入れます。沖には屋久島とこの間噴火した口永良部島が横たわり、波のしぶきをかぶりながらの入浴は大自然そのものです。この温泉は硫黄を含む強酸性なので、眼に入ると危険なため絶対顔を洗ってはいけません。

もう一つは姫島（大分県）の拍子水温泉です。観光客はあまり来ませんが、隠れた名湯です。泉質は炭酸泉で、源泉の温度は二五℃と低く、源泉と、四一℃に加温した浴槽があります。加温水に入ると肌を突き刺すような衝撃が走りました。いまどきはスーパ―銭湯などにも炭酸風呂があり、珍しいものでもなくなりました。時々入ることがありますが、二酸化炭素の泡が肌に着く程度のもです。しかしこの温泉はそんな生易しいものではなく突き刺すような感触なのです。そして、温泉の窓の外は道路を挟んですぐ海で、姫島灯台とはるか沖に山口県の祝島をみることができます。

姫島（大分県）の拍子水温泉は  
隠れた名湯

## 八．その他

### （1）教育

人口が減少し、小中学校を維持するのが難しくなっている島が多くなっています。小学校がなくなると過疎化に拍車がかかることとなります。このため、何とか島に小

学校を残そうと様々な努力が行われてきました。

一つは学区をひろげて島外から学生を通学させることです。こうした対応が可能なのは通学可能な本土に近い島に限られます。浦戸諸島の野々島（宮城県）にある浦戸小中学校（小中併設校）は小規模特任校になっており、学区外からも広く通学を認めています。年々島の人口が減り、それに合わせて子供も減りましたが浦戸諸島に小中学校を残し、これ以上の人口流出を避けたいという地域の想いと行政の努力が実を結んだ結果です。二〇一四年時点で同小中学校の児童・生徒数は三四人で、このうち島の子供は七人、残りの二四人は塩釜市や仙台市から通学してきています。また、琵琶湖に浮かぶ唯一の有人島である沖島（滋賀県）の沖島小中学校も併設校で、二〇一五年時点で在校生一人のうち八人は島外から通学している子供たちでした。

通学が困難な島では、島の里親が島外の小中学生を受け入れている

通学が困難な島では、島の里親が島外の小中学生を受け入れています。野忽那島（愛媛県）は一九八七年から島の人が里親になって都会の子供たちを受け入れ、島の子供たちと一緒に学ぶ「シーサイド留学」制度を導入しました。小学校の維持と島の活性化をねらうとともに、都会の子供たちにとっては豊かな自然環境の中で濃密な人間関係のもとで学ぶことに意義を求めたものでした。しかし、二〇〇九年四月をもって小学校が休校になってしまいました。地元の子供が一人もいなくなってしまうことから。行政としては地元の子供がいらないのに税金を投入するのは難しいのでしよう。一九八七〜二〇〇八年度までの二二年間に合計一二〇名のシーサイド留学生が巣立つ

て行きました。また、鹿児島県の三島村では、村を構成する竹島、硫黄島、黒島の小中学校では「しおかせ留学」を受け入れています。島の里親が児童・生徒を必ずやり、島の小中学校に通う仕組みです。二〇一三年時点で竹島六人、硫黄島四人、黒島三人の留学生がいました。一九九七年からこれまでに二七〇人ほどを受け入れています。親の生活費の負担額は月三五〇〇〇円です。義務教育の例ではありませんが、硫黄島には西アフリカの打楽器であるジャンベを習う「みしまジャンベスクール」があります。留学期間は半年で自炊生活をしながら島に滞在します。

島は船乗りになる人が多く、船員を養成するための教育機関の多くは島に設置

一方、島は船乗りになる人が多く、船員を養成するための教育機関の多くは島に設置されました。現在、商船高等専門学校が全国に四つありますが、このうち三校は島にあります。大崎上島（広島県）の広島商船、山口県周防大島（現在は橋で本土とつながっていますが）の大島商船、弓削島（愛媛県）の弓削商船です。本土にあるのは鳥羽商船だけです。弓削島の例をみておきましょう。一九七〇年当時、島の納税者の一八・四%が船員、造船業の従事者が四九・三%で、海運・造船関係者が島の六七・七%を占めていました。この船員供給などを担ったのが弓削商船でした。一九〇一年に弓削海員学校として産声を上げて以来、じつに一一五年の歴史を有する伝統校です。現在の学生のほとんどは島外の出身者で、その出身地は全国に及びます。また外国人留学生も近年増えています。学生の大多数は島内にある白砂寮という学生寮で生活しています。在校生は約五五〇人、教職員は約一〇〇人いますので、弓削商

船の関係者は六五〇人に及びます。島の人口の1/4を占める一大勢力です。関係者が島で生活することによって食料を始めとする消費が発生しますので、これらを含めると弓削商船の存在は島の経済を根底から支える産業となっているのは間違いありません。

## (2) 医療・福祉

島は交通が不便なことから医療機関の立地には向いていないが、伝染病の隔離という点では不便なことが逆に好条件になった

島は交通が不便なことから医療機関の立地には向いていませんが、伝染病の隔離という点では不便なことが逆に好条件になりました。ハンセン氏病の国立療養所は全国に一三ありますが、このうちの四つは島にあります。長島（岡山県）、大島（香川県）、奄美大島（鹿児島県）、宮古島（沖縄県）です。長島（現在橋が架かり本土と結ばれている）と大島は隣の島から眺めたことがあります。このうち大島は国立療養所大島青松園の入居者と職員、その家族のみが住んでいます。

周防大島の属島である情島（山口県）はもともと一本釣專業の漁師の島でしたが、年々人口が減少し、今では在来の島民は六〇人ほどにすぎません。在来の島民と書いたのはよそから人が入っているからです。島には、児童養護施設「あけぼの寮」があり、家庭のさまざまな事情で親元を離れた子供たち二〇人ほどがここで生活しています。現在は山口県の施設になっています。施設に隣接して情小中学校がありますがこ

この児童・生徒は全員施設の子供たちです。この施設の関係者や教職員を加えますと、外から来た人が四〇人以上になっています。

この施設が情島にできたのは歴史的に深いわけがあります。情島の周辺は潮流が速く、タイの一本釣の好漁場でした。潮が速いため無動力船の時代は一人で船を操船しながら釣るのは難しいことから櫓で船を定置させる梶子かこと称する労働力が必要でした。子供がいる家は、その子供が梶子になりましたが、子供のいない家は他所から雇わなければならなかったのです。伊予の方で貧しい家の子を梶子として世話をする人がいて、情島では伝統的にこの子供を労働力として活用して来ました。戦前はこうした梶子が島に二〇人ほどいたようです。子供たちは家族と一緒に生活し、働きました。戦後、この梶子が急に減ったため戦災孤児を斡旋するものが現れ、この中に不良もいて、漁師がお仕置きにダンベの中に閉じ込めたところ死亡するという事件が発生し、人身売買の島としてセンセーショナルに報道され、社会問題になったのです。

宮本常一によりますと、「この事件の後始末のためにこの島を訪れた役人は、島の環境のよさと、島民の純朴さに眼をつけて、この島に障害児の保護施設をつくるよきではないかと考えて島民に話しかけた。これを受けてたつたのが東野恭彦氏であった。そして障害児のための寮をつくった。これがあけぼの寮である」ということになり現在に至っているのです。

もうひとつの福祉施設の例は、馬渡島まなしま（佐賀県）です。この島には社会福祉法人・

児童養護施設「あけぼの寮」ができた深いわけ

聖母の騎士会が運営する児童養護施設の「聖母園」があります。島の神父であったブルトン神父が島に子供を連れてきて世話をしたことに始まります。一九二九年に設立され、八六年に及ぶ歴史をこの島に刻んできました。佐賀県と福岡県を中心に家庭環境や養育環境に恵まれない子供たちをあずかり、キリスト教的人間観や社会観に基づき養育しています。二〇一五年に訪ねた時の在籍者は高校生一人、小中学生一九人、幼児二人の、二人でした。島には馬渡小中学校があり、現在三四人の児童・生徒と一七人の先生がいますが、小中学生の半分以上が「聖母園」の子供たちで占められています。

仏教徒の集落本村。クリスチャンの集落新村

馬渡島は本村と新村という二つの集落があります。本村は漁港の近くに密集して形成され、仏教徒の人たちの集落です。一方、新村は島の台地上に人家が散在し、クリスチャンの集落です。寛政年間（一七八九～一八〇〇年）にキリシタン弾圧を逃れて佐世保市の沖にある黒島から移住してきた人たちを祖先としています。本村には半農半漁で暮らす先住民がいたため、クリスチャンは条件の悪い台地上に農地を開墾して住みました。こうした事情から台地の上には立派な教会が建っています。このような歴史的背景があり、一九二九年に島の神父であったブルトン神父が子供を島に連れてきて世話をしたことが「聖母園」のルーツになっています。ちなみに新村の人たちはもともと農業で生活していましたが、現在はほぼ漁業専門になり、延縄漁業に従事し、アカムツやレンコダイを獲っています。

### (3) 船乗りと海運業

佐久島（愛知県）は船乗りや船主を輩出した島として知られています。近世には船乗りや船主を輩出し、海運業とともに栄えました。海運業の発展とともに人口は増え、戦後のピーク時には三〇〇戸、四〇〇〇人に膨れ上がりました。

安居島（愛媛県）もかつて海運業で栄えた島です。機帆船時代は主に九州から大阪に石炭を運ぶ海運業が盛んでした。〇・二六平方キロメートルの小さな島ですが、最盛期の昭和初期には一〇〇戸六〇〇人に増えたこともありました。現在は一九人しか住んでいない（二〇一四年）過疎の島になっています。

### (4) 自衛隊の基地

国境離島は国民の生命財産を守る最前線であることから、離島の多くに自衛隊の基地や駐屯地（分屯地）が置かれています。礼文島、奥尻島（以上北海道）、佐渡島（新潟県）、見島（山口県）、対馬、福江島（以上長崎県）、下甕島、奄美大島、沖永良部島（以上鹿児島県）、久米島、宮古島、与那国島（以上沖縄県）、ただし与那国島は建設中）、父島、南鳥島、硫黄島（東京都）などです。

二〇一三年一月に与那国島（沖縄県）を訪れた時は陸上自衛隊の沿岸監視部隊の受け入れを巡って地元は賛成、反対が入り乱れていました。町長派は過疎化する島の活性化策として自衛隊の受け入れを訴え、反対派は「平和な島に自衛隊基地はいらない」と島を二分して対立していました。北朝鮮がミサイルを発射した際PAC3の配置に協力してもらったお礼に石垣市を訪れた当時の佐藤正久政務官（後の参議院外交防衛委員長）が用地取得の協力を求めるために与那国島を訪れたその日だったのです。偶然、石垣島から与那国島に向かう飛行機の中で一緒になりました。人口減少に直面する島にとって、自衛隊施設の受け入れは確かに歯止め策にはなるでしょう。国が島に資金を投入し、その資金が島内にまわるからです。

日本海側に位置する見島（山口県）の例

日本海側に位置する見島（山口県）の例をみておきます。見島は萩市の北北西約四五km沖合に位置する孤島です。島には本村と宇津という二つの集落がありますが、二つの集落を結ぶ中間のイクラゲ山という島で一番高い所に航空自衛隊のレーダー基地があります。ここには二〇一五年四月現在で一四一人の自衛隊員が駐屯しています。家族を含めると三〇〇人ほどになり、島の人口の約三割を占めています。自衛隊員は若い人が中心ですので、その子供たちは保育園児と小学生です。島の保育園の園児は二二人、新しい校舎になった小中学校には、小学生が一八人、中学生が四人在席しています。この多くが自衛隊員の子供たちです。また、島の玄関口には三階建てと四階建てのコンクリート製の宿舎があります。見島の人口は一九五五年がピークで三〇〇〇人を超えていましたが、島の経済の中心である漁業の不振から年々人口が減ってきましたので、自衛隊の存在は島の過疎化対策として一定の役割を果たしてきたことは事実でしょう。

### （5）行商で栄えた島

睦月島と野忽那島（愛媛県）の人々の生活を支えたのは衣類の行商

行商で栄えた風変わりな島の例を紹介しましょう。忽那諸島に睦月島と野忽那島（愛媛県）という小さな島があります。この島の人々の生活を支えたのは衣類の行商でした。睦月島は、江戸時代、瀬戸内海の本船航路に位置し、潮待ち、風待ちの港でした。島の人たちは湾に停泊する帆船に小舟で野菜や薪炭を売り回っていました。そのうち島でつくっていた反物をもつていったところよく売れたそうです。これがきっかけになり、沖売りからさらに天馬船で近くの沿岸の村々に販路を拡大していきました。販路拡大とともに島で織った反物だけでは品物がたりなくなり、仕入れて販売するようになったのです。行商は貴重な現金収入源になりました。明治、大正、昭和初期は船による移動が中心でしたので、一隻に四〜五人の売りが乗り込んで、瀬戸内海沿岸の各地の港に係留して、港を起点に売りが反物を担いで売り歩きました。一九三五年当時、隣の野忽那島を併せるとこうした行商船は三〇隻ほどありました。その後売り子の数は一隻に一五〜一六人に増えて、五島や対馬まで商売の範囲を広げ

ました。

行商は量販店の登場などで成り立たなくなり、徐々に少なくなりました。

戦後は陸上交通が発達し、船による移動販売は終焉しましたが、かわって汽車やバスによる移動販売に切り替わります。売り物も反物から背広などの洋服に変わり、戦後の物資不足で飛ぶように売れたそうです。行商の範囲も北海道から九州まで及びました。行商が島の経済を支え、この島は裕福でした。その証拠に「長屋門」づくりの豪勢な邸宅が残っています。また、行商で稼いだ金でミカンの木を植えました。高度成長期になると、ミカンは収穫期を迎え、ミカン景気に湧きました。しかし行商は量販店の登場などで成り立たなくなり、徐々に少なくなりました。私が野忽那島で会った漁師は一九七〇年ごろまで行商をしていたそうです。

## 九．島旅から見えてきたもの

### (1) 無人島化と限界集落化

私が島旅を始めてから四年になりますが、この間にも島から人がいなくなっています。人が住んでいると思っただけで出てみたら既に無人島になっていたり、もはやコミュニティを維持できなくなった島にも遭遇しました。人口の都市への集中が進み、地方が疲弊する中で地方創生が叫ばれています。過疎化、高齢化の先端を走っているのが離島です。島に人が一番多かったのは「団塊」の世代が子供だった一九五〇～六〇年ごろでした。この当時からみると島の人口（六三・六万人）は半分になってしまいました。また二〇一〇年国勢調査時の平均高齢化率は三二・三％で、全国平均の二三・〇％を大きく上回っています。一方人口の減少によって島から小中学校が消えつつあります。二〇一二年と二〇〇〇年を比較しますと、この一〇年ほどの間に小学校が九三校、中学校が七二校なくなりました。そして二〇一二年五月現在、小学校がない島は一三〇に及びます。小中学校の休校や廃校は子供を持つ若い世代の島外流出に拍車をかけ、悪循環を生むことになります。この状態が続けば、無人島は確実に増加していくことでしょう。これまでに訪れた島の中で、無人島化した島、限界集落化している島を紹介します。

小中学校の休校や廃校は子供を持つ若い世代の島外流出に拍車をかけ、悪循環を生む

している島を紹介します。

錦江湾に浮かぶ新島（鹿児島県）は桜島の噴火でできた島で、一八〇〇年ごろ桜島の赤水村や里上村から漁師二四人が移住してきました。面積〇・一三平方キロメートル、周囲二・三kmの小さな島ですが、戦後間もなくは人口が二五〇人を超えた時期もあります。島には小学校の分校もありましたが、その後人口流出が相次ぎ、一九七二年に分校は廃校になりました。二〇一三年六月までは三戸、四人が住んでいたのですが、全員島を去りました。島にっつきり人が住んでいると思っただけですが（一応、遊漁客などが島に来るため定期船は一日二便運航されていました）、島に上陸するといきなり痩せこけた猫が四匹現れたのです。猫に同情して昼食用に購入してきた

萩諸島の櫃島（山口県）は、現在二戸、三人が住民登録されているが、実際には四年前から人が住んでいない

パンを与えると先を争って食べていました。集落の家は朽ち果て、あるいは生活の跡を残しながら放置され、折からの桜島の噴煙で島は灰だらけでした。

萩諸島の櫃島（山口県）は、現在二戸、三人が住民登録されていますが、実際には四年前から人が住んでいません。港が貧弱で大きな船を係留できないことから漁業は発達しませんでした。島の周囲が好漁場であったので戦後間もなく、島民全員が出資して大型定置網の経営に乗り出したのですが、見事に失敗したのです。櫃島は面積〇・八三平方キロメートル、周囲四・〇kmの小さな台地状の島で、台地は平坦で畑が広がっていました。戦後の農地解放で一戸あたり三ヘクタールの土地が配分され、定置網の失敗後、葉タバコの栽培に活路を見出します。萩の図書館で、評論家の埴谷雄高が一九六二年に取材した朝日ジャーナルの記事を偶然見つけましたが、当時島には一〇戸六四人が住んでいて、島民全員の集合写真が写っていました。最後の島民になった山根さんに島を案内してもらいましたが、当時の家はそのまま、農機具や資材も放置され、とりわけ土蔵づくりの葉タバコの乾燥庫が印象的でした。この島が無人島化したのは、満足な漁港がないため漁業が発展せず、葉タバコ栽培に島の経済を依存しきった点にあると思われまます。

小値賀島の属島の六島（長崎県）は江戸時代には捕鯨の根拠地として栄えた島です。その後半農半漁と冬季の酒造メーカーや紡績工場への出稼ぎで、島民は生活していました。一九七〇年には、面積〇・六九平方キロメートルの小さな島に三九戸、一八四

人が暮らし、小中学校も置かれていました。島民は防風林の松を売って漁港建設の負担金を捻出し、漁港を整備、半農半漁の暮らしから漁業に活路を見出しました。ところが防風林を伐採したことが裏目に出て、一九八七年に島を襲った台風で島の家は壊滅的な打撃を受けます。また、温暖化に伴う水温上昇によって磯焼けが広がり、アワビやヒジキは激減、回遊性魚類も変化、加えて一九九〇年代後半からの産地価格安の影響を受け、漁業は不振に陥りました。こうした変化を契機に佐世保市に移住する人が増え、私が訪問した時は四戸、七人になっていました。三戸は夫婦ですが、残りの一戸は島出身のJICAを定年退職した単身者で、島の再生をめざして孤軍奮闘していました。三戸は建網、イサキ釣り、クエ延縄などの漁業を営んでいます。農地は荒廢の極みにあります。最近、池袋のサンシャインで開催された「アイランダー」でJICAのOB氏に会いましたが、現在は三人になったそうです。六島の限界集落化は水産資源の減少が大きな要因でした。

福江島の属島の黒島（長崎県）の島民は二人だけです。本島と結ぶ渡海船は週一便しかないのです。漁船をチャーターして渡りましたが、九六歳の後期高齢者と六七歳になる娘の二人しかいませんでした。漁港から少し登ったところに集落が形成され、三〇戸ほどの家が整然と立ち並んでいましたが、ゴーストタウンと化していました。この島はもともと以西底曳網漁業の乗組員が多かったのです。女は畑を耕して食料を自給、男は乗組員になって現金を稼ぎ、定年退職後島に戻って小漁師をしていました。

福江島の属島の黒島（長崎県）の島民は二人

黒島の限界集落化は以西底曳網という遠洋漁業の衰退が直接的引き金になった

しかし以西底曳網の衰退で、島の若者は別の就職口を求めて島外に就職し島に戻りませんでした。引退して島に戻った男たちも高齢化して、どんどん人が減ってしまつたのです。黒島の限界集落化は以西底曳網という遠洋漁業の衰退が直接的引き金になったと思われまふ。

上島諸島の赤穂根島(愛媛県)は岩城島の南側にある面積二・〇九平方キロメートルの島です。一九五一年頃までは人が住んでいましたが、その後岩城島の出作地となり、一九七二年時点では水田五・五ヘクタール、畑が五二・九ヘクタールありました。しかし農業が振るわない中で、耕作放棄が進みました。また過去にはゴカイ養殖が営まれていたようで、その跡地が放置されていました。バブル期にはこの島にゴルフ場の計画が持ち上がり、耕作をやめていた農家は土地が高く売れると期待を持ったそうですが、バブルがはじけて中止になり、期待は裏切られました。現在、この島に住民登録している人は一組の夫婦だけです。島で有機農業をめざして頑張っています。しかし、タヌキが繁殖し、道路の真ん中のところどころに狸の「ためグソ」が落ちていました。また、イノシシも多く、筍を食べるものですから竹藪が荒廃しています。

## (2) イノシシの繁殖と農地の荒廃

私は四年前から千葉県鋸南町で農業を始め、これまでに四回米を収穫しました、と言いたいところですが、一昨年は電気柵を張り巡らせていた柵田にイノシシが侵入してメチャメチャにされ、収穫できなかつたのです。都会に住んでいる人は実感できないと思いますが、関東以西の地方は猪、鹿、猿などの獣害に悩まされています。これは田舎に人がいなくなり、山から野生動物が里山に進出、人と野生動物のバランスが崩れたためです。過疎化、高齢化した地域では耕作放棄地が拡がり、人が関与する二次的自然である里山が荒廃しています。この結果、人と野生動物の接する前線がどんどん人の住む側に移動しているとみていいでしょう。この状態が最も悪化しているのが島です。

イノシシは四〇〜五〇kmも泳ぐそうです。近年、イノシシが島から島へ泳いで移動し、その生息範囲を拡げています。イノシシが人口よりもはるかに多く生息する島も増えてきました。対馬では江戸時代に猪の被害で苦しみ、石垣をつくって対応、絶滅させることに成功しました。一〇〇年以上もイノシシがみられなかったのですが、一〇数年前から現れ、農業被害や崖崩れに悩まされています。イノシシの農地への侵入を防ぐためには、電柵を巡らせるか、トタン等で囲いをつくらなければなりません。高齢者はこうした対策は面倒ですので、いきおい農業のやる気がうせ、農地の荒廃に拍車がかかることとなります。島の農業にとってイノシシの被害は無視しえない規模に拡大していますので、その現状を紹介します。

唐津市には八つの離島がありますが、このうちイノシシが生息していないのは宝く

過疎化、高齢化した地域では耕作放棄地が拡がり、人が関与する二次的自然である里山が荒廃

神集島（佐賀県）は、一〇数年前からイノシシが渡って来てものすごい勢いで増えてしまった

じがあたることで有名な宝当神社のある高島（佐賀県）だけで、残りの七島にはイノシシがいます。このうちの一つ・神集島（佐賀県）はまき網漁業で栄えた島ですが、一〇数年前からイノシシが渡って来てものすごい勢いで増えてしまいました。イノシシは農作物への被害に加えて、大好物のミミズを探して土手を掘りかえすため水の流れが変わり土砂崩れなどにつながっていると言います。この島の区長さんはイノシシ獲りの名人ですが、箱罟を山に仕掛けて年間二〇〇頭ものイノシシを駆除しています。これだけたくさん獲れますと解体作業が間に合わず、もったいないことに屠殺したイノシシは投棄されています。

日生ひなせの前にある鹿久居島（岡山県）は文字通り鹿が生息する島です。面積は一〇平方キロメートル以上もある大きな島ですが戦前まで人は住んでおらず、戦後国有地が開拓地にされ、五七戸が入植しました。しかし現在は五戸、八人しか住んでおりません（二〇一二年時点）。この島もイノシシが跋扈していて、私が訪ねた時もイノシシが二日続けて箱罟に掛かっていました。

### （3） 共同の社会

海で閉ざされた島は外部との交流も少なく、しばらく前までは通婚の範囲も島の域を出ることは少なかったようです。厳しい自然環境や食糧事情の中で、島の人々はお

島全体が運命共同体のようなものだった

互いに支え合って暮らしてきました。いわば島全体が運命共同体のようなものだったのです。したがって島には貧富の格差なく、平等に暮らす風土が形成されていました。島では、「子供は島の宝だ」といってコミュニティ全体でその成長を喜び、また他人の子供の世話を焼きます。家を戸閉まりすることは稀で、誰かが家の上がり込み、「冷蔵庫を開けたら刺身が入っていた」といった手の話はよく聞きます。島であるが故に共同の社会があったのです。

小値賀島の属島に大島（長崎県）という小さな島があります。船が着く港の正面に「自力更生」と書かれた石碑が建っています。この島には、生活に困窮した島民を隣の宇々島という無人島に一定期間移住させ、島の周りの水産資源や耕作地、放牧地を困窮者に独占的に利用させて、自力更生を促す制度がありました。この制度は享保年間（一七一六〜一七三五年）に始まり一九六〇年代まで続きました。こうした共同体の精神を後世に伝えるため石碑が建てられたのです。

紀伊水道にある出羽島（徳島県）は〇・六五平方キロメートルの小さな島ですが、かつて遠洋漁業で栄えた島でした。この島には「歩」という相互扶助の制度がありました。島内には五隻のカツオ船があり、それぞれに組がありました。組に男子が生まれると、小学校を卒業するまで一律に一分の配当金を与えて組内の子となり、小学校を卒業すると三分の配当を受け、一七歳になるといよいよ本船に乗ってカツオ釣りで遠洋に出漁しました。ただ、一人前の扱いを受けず「かじ子」と称する八丁櫓の漕ぎ

手となって五分の配当を受けました。その後本格的な漁師になると一〇分となり、歳老いて引退すると三分の配当をもらい、孫の面倒を見ながら隠居生活を送ったそうです。つまり生涯にわたって面倒をみる制度があったのです。ただ、カツオ漁業の経営が厳しくなると、この制度は崩壊しました。

瀬戸内海に端島（山口県）というやはり〇・六七平方キロメートルのちっぽけな島があります。この島の自治会長さんの家をうかがった時の話です。島には食堂も店もないので、厚かましくも昼食を御馳走になりました。区長さんは中学を卒業すると、大阪に集団就職し、島を離れて建設関係の仕事をしていました。事情はわかりませんが、三五歳の時に離婚して二人の男の子を連れて無一文で島に帰ったそうです。ちょうど島から帰った翌日が二人の子の遠足の日にあたっていて、心配した島の人たちが子供たちのために山のような弁当を持って来てくれたそうです。その後も名も告げず野菜を玄關に置いて行く人が絶えなかったといえます。「やっぱり島はいいな」と心から思ったそうです。自治会長さんは、「この恩は一生忘れられない」といい、恩返しのため島の高齢者の面倒を積極的にみていました。

#### （4）脱成長の世界

商品経済化の波が押し寄せるまで、ほとんどの島は自給を原則とする世界でした。

最小限のお金を稼ぎ、苦しい生活ながら人生を楽しんでいました。あるいは苦しいということすら気付かなかったのかもしれない。

埴谷雄高は、檀島のルポルタージュで、「朝から夜半まで過重な労働にあげられていちまいの新聞にも長い歴史へも関心など持ち得ない島、それはやはり困難な貧困に追われた島であるとともに、また飛躍していえば、目の前の日常の時間のみしかない一種の桃源郷といえるかもしれない」と書き、「灰色の桃源郷」と表現しています。しかし、市井の民にとって、「目の前の日常の時間のみしか」ないのが現実です。それゆえ、埴谷が訪れた檀島の全島民の家族写真は笑顔に満ちあふれていたのです。

グローバル化した商品経済が世界を支配し、GDPのプラス成長、つまり経済成長が大前提となつて、人々はお金のために必死に働いています。特に日本のように、人口が減少し、欲望が限界に近くなつてくると、成長するためには、お金で表現されなかった仕事を次々と外部化していかざるを得ません。今まで家庭の内部で処理されていた炊事、洗濯、育児、教育、介護など、何から何まで社会化してきました。つまり家庭のシャドーワークを外部化することで、ますますお金が必要な社会になっていきます。都市はまさにその典型で、万事お金の世界になってしまいました。

一方、経済成長はさまざまな形で環境への負荷を発生させました。ダム建設は国土や自然の破壊を、化石燃料の消費は地球温暖化を、原子力発電は核燃料廃棄物の処理問題や放射能汚染を、再生可能エネルギーは将来の老朽化した施設や材料の廃棄物

都市は、万事お金の世界になつてしまった

高度に経済発展した国では、経済成長は限界にさしかかっている

問題や環境汚染を抱え、どれ一つとっても将来を託せるエネルギー源はありません。つまり省エネを進めると同時に、エネルギー消費を減らすしか人類の生存できる道はないように思われます。

このように既に高度に経済発展した国では、経済成長は限界にさしかかっています。日本はまさにその当事者であり、失われた二〇年を経て、長いデフレから抜け切れていません。もはや経済成長は構造的にも、環境的にも歴史的限界を迎えているのでしよう。こうした中で、成長の限界を指摘し、「脱成長」を主張するフランスの経済哲学者ラトゥーシュなどの潮流が台頭し、日本でも水野和夫が「資本主義の終焉と歴史の危機」を書き、佐伯啓思などの思想家も歴史的な転換期にあることを主張しています。

島、とりわけ小さな島は半農半漁の生活を基本としていました。つまり自然に依存する一次産業を生業としてきたのです。島は見渡せる規模の空間しかなく、コミュニティの規模も小さいので、否応なしに土地の限界、資源の限界を認識できました。島の人々はこうした世界で暮らしてきたのです。そこには、いわば「脱成長」の世界が営々としてありました。島の最も重要な産業である漁業は海の生態系サービスを享受するものです。島の周辺の水産資源は抑制された利用が必要であることを島の人々はわかっていましたから、様々なルールを自主的に定めて持続的利用を図ってきました。漁業が脱成長の産業であることがわかっていたので。

しかし高度経済成長期を境に、貨幣経済の波が島の隅々まで及びますと、「成長」という概念が島を不幸にしました。万事お金の世界が島にも押し寄せたのです。収入源が限られる島の経済は疲弊し、都市へと人口が流出、いまや限界集落化の危機に続いて、無人島化の危機に直面していることは先に述べた通りです。

ところが近年、成長の世界からドロップアウトして島に住み、昔ながらの自給的生活を楽しむ人たちが出現しています。こうした動向は島の将来を、ひいてはこれからの世界を暗示する動きかもしれません。

**加計呂麻島（鹿児島県）**には三〇の集落がありますが、このうちの八つは一〇戸未満のいわゆる「限界集落」です。ところがほとんど人がいなくなった集落に島外からやって来た人が住み着いていました。私が確認しただけでも、嘉入集落<sup>かたご</sup>で、農業をしながらジャムをつくりミツバチを飼っている夫婦、肖像画を専門とする画家、薩川集落には夫が家具職人で妻がマクロピオティックの食堂を営む夫婦、諸鈍集落<sup>しよとん</sup>には大阪から来た美容師兼理容師の夫婦、徳浜集落には三戸のイターン家族が住み、畑をつくりながらカフェや民宿をしていました。ある家では男の子が素っ裸で遊んでいたのです。勢里集落では蕎麦をつくり、手打ち蕎麦をふるまう蕎麦職人。たまに観光客が来るのか来ないのかわからないようなまったく辺鄙な集落なのです。つまり都会の感覚からいえばほとんど現金収入のあてなどない世界でこの人たちはどう暮らしをたてているのかと思うのですが、少なくともこういう人たちが確実に存在し、しかも増えつつあるのは間違いない事実です。

近年、成長の世界からドロップアウトして島に住み、昔ながらの自給的生活を楽しむ人たちが出現

もう一つ事例を紹介します。福江島の属島の赤島(長崎県)という小さな島です。昔、カツオ漁でにぎわい、その後は以西底曳網の乗組員を供給した島ですが、黒島(長崎県)と同様どんどん過疎化が進み、やはり無人島になりました。そこに島出身の小値賀町役場で働いていた人がＩターンの誘致の活動を展開し全国からＩターン者が赤島にやってきました。現在一六人が住んでいます。このうちの一〇人は島外から来た人です。そして島の自治会長は選挙によってＩターンの人に代わっています。島外から来た人の中に若い人はいません。退職金をもらい、島の周りでイセエビなどを獲り、のんびり暮らしている人ばかりです。何でまた、離島の中の更に離島に好き好んでやって来て、不自由な生活(水はいまだに雨水、船便は一日二便しかない、医者はいない)をするのか理解できない人がほとんどだと思われませんが、でも確実にこうした生活を志向している人が増えていきます。

### あとがき

島は周囲を海で閉ざされ、険しい山に覆われた自然条件のところどころが圧倒的に多く、こうした厳しい自然条件のもとで人々は暮らしてきました。本土とはまったく異なる立地条件、自然条件のもとで人々はどうのように暮らしてきたのか、そしてどのように暮らしているのか、興味が尽きません。本稿はこれまでに訪れてきた島

を中心に島の人たちの暮らしを支えてきた仕事とはどんなものだったのかを分類、整理したものです。なにぶん、浅学非才の身で不十分なものだと思いますが、事実誤認など気がついたことがありましたらご指摘いただければ幸甚です。

訪れた島はまだ半分で、私の島旅は道半ばです。これからも有人離島の全島踏査をめざして島旅を続けるつもりですが、あと五、六年はかかりそうです。

なお、島旅のうちの一部を(株)生物研究社発行の「海洋と生物」という雑誌(隔月刊)に島別に「小さな離島の暮らしと漁業」と題して連載中です。興味のある方はご覧いただければ幸いです。

東京水産振興会の御好意で、これまでの島旅のいわば中間報告をまとめることができました。貴重な発表の機会を提供していただきましたことに感謝申し上げます。

表3 著者が訪問した離島の都道県別一覧

| 都道県名 | 島名   | 掲載ページ              | 都道県名 | 島名                 | 掲載ページ | 都道県名        | 島名       | 掲載ページ                   | 都道県名 | 島名      | 掲載ページ |
|------|------|--------------------|------|--------------------|-------|-------------|----------|-------------------------|------|---------|-------|
| 北海道  | 徳尻島  | 33, 43             | 岡山県  | 徳久居島               | 118   | 愛媛県         | 生名島      | 65, 87                  | 長崎県  | 須島      |       |
|      | 大赤島  | 42                 |      | 大多府島               | 38    |             | 岩城島      | 18, 24, 90              |      | 中通島     |       |
|      | 大島   | 54                 |      | 頭島                 | 38    |             | 赤根銀島     | 116                     |      | 若松島     |       |
| 山島   |      | 高島                 |      | 64                 | 安原島   |             | 109      | 奈留島                     |      |         |       |
| 江島   |      | 石石島                |      | 64                 | 龍島    |             |          | 福江島                     |      | 66, 109 |       |
| 網地島  | 53   | 北木島                |      | 70                 | 野架那島  |             | 104, 111 | 赤島                      |      | 54, 124 |       |
| 国代島  | 53   | 宮崎島                |      |                    | 陸月島   |             | 111      | 黄島                      |      | 54      |       |
| 栗原沢島 | 57   | 末島                 |      | 63, 74             | 中島    |             | 22       | 黒島密2                    |      | 54, 115 |       |
| 野々島  | 104  | 細島                 |      | 18                 | 琴和島   |             | 65       | 島山島                     |      | 66      |       |
| 杜島   | 63   | 佐木島                |      | 16, 18, 29, 38, 85 | 津和地島  |             | 29       | 崎崎島                     |      |         |       |
| 山形県  | 杜島   | 29, 57             | 小佐木島 | 89                 | 二神島   | 18          | 松島       | 67                      |      |         |       |
|      | 飛島   | 30, 54             | 生野島  |                    | 釣島    | 22          | 姫島       | 65, 87, 103             |      |         |       |
|      | 太島   | 35                 | 大崎上島 | 36, 87, 105        | 龍原島   | 22, 24, 75  | 地無形島     |                         |      |         |       |
| 東京都  | 和島   | 35, 40, 101        | 長島   |                    | 青島    | 46          | 保戸島      | 50                      |      |         |       |
|      | 新島   | 77                 | 阿多田島 | 18, 58             | 沖の島   | 18, 29      | 上瓶島      |                         |      |         |       |
|      | 式根島  |                    | 徳島   | 120                | 徳来島   |             | 中瓶島      |                         |      |         |       |
|      | 神津島  | 101                | 杜島   |                    | 神島    | 36          | 下瓶島      | 78, 109                 |      |         |       |
|      | 三宅島  |                    | 黒島   |                    | 地島    |             | 新島       | 113                     |      |         |       |
|      | 御蔵島  | 35, 40, 97, 101    | 情島   | 106                | 大島    |             | 種子島      | 78, 95                  |      |         |       |
|      | 八丈島  | 25, 29, 90         | 浮島   | 74                 | 相島    | 61          | 竹島       | 31, 40, 105             |      |         |       |
|      | 青ヶ島  | 40, 42, 72, 79, 88 | 前島   |                    | 龍吉島   |             | 碓氷島      | 31, 40, 101, 105        |      |         |       |
|      | 粟島   | 36, 92             | 笠佐島  |                    | 野島    |             | 奄美大島     | 66, 78, 90, 106, 109    |      |         |       |
|      | 佐渡島  | 24, 60, 77, 109    | 祝島   | 24                 | 高島    | 118         | 喜島       | 28, 48, 66, 78, 80      |      |         |       |
| 石川県  | 輪倉島  | 47                 | 八島   |                    | 神集島   | 118         | 加計呂麻島    | 61, 66, 123             |      |         |       |
|      | 初島   |                    | 牛島   |                    | 小川島   | 43          | 徳之島      | 27, 78, 81              |      |         |       |
| 愛知県  | 日間賀島 | 97, 109            | 生島   |                    | 加唐島   | 29          | 沖永良部島    | 25, 27, 78, 80, 109     |      |         |       |
|      | 日聞賀島 | 92                 | 蓋井島  |                    | 松島    | 24, 94      | 与論島      | 78, 80                  |      |         |       |
|      | 篠島   | 74                 | 豆島   | 29, 110            | 馬渡島   | 107         | 伊江島      | 25, 81                  |      |         |       |
| 三重県  | 神島   |                    | 大島   | 18, 29, 57         | 向島    |             | 津根島      | 19, 28, 62              |      |         |       |
|      | 笠志島  |                    | 糠島   | 114                | 対馬島   | 36, 49, 109 | 久高島      | 19                      |      |         |       |
|      | 菅島   |                    | 相島   | 18, 29             | 島山島   |             | 龍田島      | 32, 83, 88              |      |         |       |
|      | 坂手島  | 49                 | 伊島   | 49                 | 老岐島   | 36, 49, 78  | 密間味島     |                         |      |         |       |
|      | 渡鹿野島 |                    | 出羽島  | 96, 119            | 鹿島    |             | 久米島      | 50, 90, 109             |      |         |       |
|      | 間崎島  | 18, 62             | 男木島  | 63, 96             | 黒島密2  | 38, 70      | 宮古島      | 50, 90, 106, 109        |      |         |       |
|      | 淡路島  |                    | 女木島  | 29, 96             | 青島    | 66, 93      | 伊良部島     | 50                      |      |         |       |
|      | 男鹿島  | 69                 | 本島   |                    | 飛島    | 68, 75      | 石垣島      | 2, 66, 81, 90           |      |         |       |
|      | 家島   |                    | 牛島   |                    | 青島    | 45          | 竹富島      | 2, 19                   |      |         |       |
|      | 比勢島  | 55, 63, 66         | 法島   |                    | 宇久島   |             | 西表島      | 2, 81                   |      |         |       |
| 兵庫県  | 西島   | 69                 | 佐瀬島  |                    | 大島    | 114         | 黒島       | 19, 31                  |      |         |       |
|      | 島後島  | 36, 77             | 高見島  |                    | 納島    | 29          | 波田間島     | 20, 78, 81              |      |         |       |
|      | 中ノ島  | 60                 | 魚島   | 63, 84, 105        | 小値賀島  | 32, 45      | 与那国島     | 46, 66, 79, 81, 90, 110 |      |         |       |
| 島根県  | 西ノ島  | 32, 60             | 戸隠島  | 84                 | 黒島    |             | 笠賀島      |                         |      |         |       |
|      | 知夫里島 | 32                 | 佐島   | 84                 | 大島    | 119         | 神島       | 36, 70, 104             |      |         |       |
|      |      |                    | 豊島   | 84                 |       |             |          |                         |      |         |       |

- ※1 著者が訪問した離島のうち、本文中に記述（島名を太字で表記）がある主なページを表に掲載した。
- ※2 伊万里湾の黒島。
- ※3 福江島の属島の黒島。

## 時事余聞

◇：桜の開花予想というところが早いと怒られそうだが、二月の初めなのに四月中旬の陽気などの予報が出るし桜の開花時期が気になる。気象庁は二〇一〇年から開

花予報は中止、現在は民間の機関が行っている。民間機関によると今年九州や四国地方は平年より早いという。ただ、中国、近畿、東海、北陸、関東地方は平年並み。東北地方は平年より早そうだ。北海道は平年並みとのこと託宣。桜前線が津軽海峡を渡るのは四月末となるようだ。

◇：日本人が花、とり分け桜に関心を注ぐのは、その花の性格にとらわれるからである。厳しい桎梏の冬から一挙に解放され、ぱつと咲き、日ならずしてまたぱつと散る。その潔さが日本人の心情にあうのだろう。だからこそ詩歌の世界でも多く扱われる。人は武士、花は桜という、代表例が多い。桜の見頃には人々は桜並木の下にダンボールを敷き、あぐらをかいて大勢で酒盛りを開く。これがまた正月に続く楽しみの一つになる。

◇：日本人は松竹梅も好む。いずれも節をまげずに一本気で、頑固で気丈なところが性にあうのだろう。なお漢字の桜(櫻)は中国では日本の桜とは違う種類の植物を指していた。そのため、日本でいう桜を詠んだ中国の古典的な詩歌は無い。ただ、日本人の気性にピッタリ適合する漢詩

がある。秦王(後の始皇帝)の暗殺を命じられた刺客荊軻の旅立ちの心境である。彼は易水のひとつで筑の音に託して悲壮な気持ちに詠む。／風蕭々として易水寒し／壮士ひとたび去つて復た還らず／である。結局、荊軻は仕損じ、返り討ちに遭つて息絶えた。荊軻はなぜこの計画に命を賭ける気になったのか。男と見込んで頼まれたからだという。

◇：先に太平洋戦争の際、戦場に出かけた日本人の兵士と心境を同じくする漢詩もある。唐の王翰という詩人の「涼州詞」。「葡萄の美酒、夜光の杯／飲まん」と欲すれば、琵琶、馬上に催す／酔うて沙場に臥す、君笑うこと莫かれ／古来征戦、幾人か回る」。昔から戦場に駆り出された者が何人国に帰れたことか。(K)

## 編集後記

筆者の乾氏は日本の離島巡りを続けられ、二〇一五年末でその数は一七〇島に及びます。島では必ず漁港や漁協事務所、郷土資料館などに立ち寄り、現地の方々の話や資料を集め、島の歴史と暮らしを理解することに努めておられます。そうした島旅の記録をまとめて頂きました。どうしてこんな処でと思われるような島にも人が暮らしていて、様々な仕事や産業があり、日本社会の奥深さを垣間見ることができそうです。筆者の労作に対して深く感謝申し上げます。

### 「水産振興」 第五七八号

平成二十八年二月一日発行

(非売品)

編集兼  
発行人 井上恒夫

発行所

〒104-0055 東京都中央区豊海町五番一  
豊海センタービル七階

一般財団法人 東京水産振興会

電話 ☎ 三五三三八二一

FAX ☎ 三五三三八二六

印刷所 (株)連合印刷センター

(本稿記事の無断転載を禁じます)

ご意見・ご感想をホームページよりお寄せ下さい。

URL <http://www.suisan-shinkou.or.jp/>

平成二十八年二月一日発行（毎月一回一日発行）五七八号（第五十卷二号）